

—— 千葉県市原市 ——

永田、不入窯跡

1985

財団法人 市原市文化財センター

序 文

本市は、房総半島東京湾岸の中央部に位置し、地理的、気候的に恵まれているため、永く歴史の舞台として埋蔵文化財が豊富に認められております。一方、首都圏に位置し、京葉工業地帯の中核都市として地域開発も急速に進行してきております。その結果「開発と文化財の保護」との調和を図る必要性が高まっております。

今回の調査は、市原市久保地区の圃場整備事業に伴い、現状保存される永田・不入窯跡の確認調査であり、文化庁の国庫補助事業として、農業基盤整備事業等と埋蔵文化財の保護との関係の調整について、関係機関のご協力をいただいて実施しました。

本報告書は、この調査の成果をまとめたものであり、今後の文化財保護活用的一端として役立つことができれば幸いと存じます。

調査にあたりましては、千葉県教育庁文化課、千葉県市原土地改良事務所、市原市加茂土地改良区等の方々に御協力をいただき厚くお礼申し上げます。

昭和 60 年 3 月

市 原 市 教 育 委 員 会

教育長 星 野 一 郎

1. 本書は、千葉縣市原市不入 697－43番地の県営ほ場整備事業の実施にあたり、現状保存される予定の埋蔵文化財包蔵区域の範囲を確定し、その内容を明らかにするために行なわれた確認調査の報告書である。
2. 本書に所収する内容は、昭和59年度に調査の対象となった千葉縣市原市不入 697－43番他に所在する「永田窯跡」及び「不入窯跡」についての資料報告書である。
3. 発掘調査及び整理作業は、文化庁の国庫補助事業として、補助金を受けた市原市教育委員会の依頼により、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の要請と指導のもとに、財団法人市原市文化財センターが実施し、報告書刊行については市原市教育委員会で行なった。
4. 調査は昭和59年10月29日から昭和59年11月30日まで実施し、整理を昭和59年12月1日から昭和60年2月28日まで実施した。
5. 調査及び整理は、財団法人市原市文化財センター主任調査研究員 山口直樹が担当した。
6. 本書の作成・執筆は山口が担当した。
7. 調査及び本書の作成にあたっては、千葉県教育庁文化課、千葉縣市原市土地改良事務所、市原市加茂土地改良区の関係者各位をはじめとして、多くの方々の御指導、御協力をいただいた。尚、整理にあたっては国士館大学学生 矢野淳一君に協力していただいた。

調 査 組 織

調査員	田 中 清 美	市原市教育委員会文化課
	小 出 紳 夫	市原市教育委員会文化課
	山 口 直 樹	財団法人市原市文化財センター
事務局		
事務局長	山 口 唯 一	市原市教育委員会文化課長
書 記	矢 島 秀 朗	市原市教育委員会文化課長補左兼文化財保護係長
書 記	伊 藤 慶 一	市原市教育委員会文化課主任主事
調査組織		
財団法人	市原市文化財センター	調 査 課 長 郷 田 良 一
常務理事	井 原 茂	主任調査研究員 山 口 直 樹
		調 査 研 究 員 宮 本 敬 一
庶務課長	小 茶 文 夫	調 査 研 究 員 米 田 耕 之助
主 事	浅 利 幸 一	(兼)調査研究員 浅 利 幸 一
主 事 補	相 野 光 江	調 査 研 究 員 近 藤 敏
		調 査 研 究 員 高 橋 康 男
		調 査 研 究 員 田 所 真
		調 査 員 鈴 木 英 啓

本文目次

序文 例言 調査組織

I	調査に至る経緯と調査経過	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の経過	1
II	遺跡の位置と地理的環境	2
III	遺跡の歴史的環境	6
IV	永田，不入窯跡調査・研究の沿革	7
V	調査の方法	10
1.	発掘の方法	10
2.	整理の方法	10
VI	永田窯跡の調査	11
1.	基本層序と調査区内の分布	11
2.	出土遺物	11
VII	不入窯跡の調査	19
1.	基本層序と調査区内の分布	19
2.	出土遺物	19
VIII	周辺の遺物散布地区	22
IX	まとめ	25

挿図目次

図 1.	永田，不入窯跡周辺地形及び関連遺跡分布図	3
図 2.	永田，不入窯跡周辺地形図	4
図 3.	永田，不入窯跡周辺地形及び調査区域位置図	5
図 4.	1974 年調査時の主な出土須恵器	9
図 5.	永田窯跡，確認トレンチ配置図	12
図 6.	永田窯跡，確認トレンチ出土遺物(1)	15
図 7.	永田窯跡，確認トレンチ出土遺物(2)	16
図 8.	不入窯跡，確認トレンチ配置図	20

図 9.	不入窯跡，確認トレンチ出土遺物(1)	22
図10.	不入窯跡，確認トレンチ出土遺物(2)	23
図11.	永田窯跡，遺物包含層土層断面図(1)	27
図12.	永田窯跡，遺物包含層土層断面図(2)	29
図13.	不入窯跡，遺物包含層土層断面図(1)	31
図14.	不入窯跡，遺物包含層土層断面図(2)	33

図 版 目 次

図版 1.	1	ふじ山から永田台地をのぞむ（南東側より）
	2	永田窯跡調査区域遠景（南側よりのぞむ）
	3	永田窯跡調査区域近景（北西側よりのぞむ）
	4	永田窯跡南東部調査トレンチ配置状況（北西側よりのぞむ）
図版 2.	1	永田窯跡調査区域台地側トレンチ配置状況（南東側よりのぞむ）
	2	永田窯跡北西部調査トレンチ配置状況（南側よりのぞむ）
	3	永田窯跡第 2 トレンチ配置状況（南東側よりのぞむ）
	4	永田窯跡調査区域より「短絡部」方向をのぞむ（北東側より）
図版 3.	1	永田窯跡第 4 トレンチ A 区土層断面（西側よりのぞむ）
	2	永田窯跡第 3 トレンチ G・H 区発掘状況（南西側よりのぞむ）
	3	永田窯跡第 6 トレンチ K・L 区土層断面（西側よりのぞむ）
図版 4.	1	不入窯跡調査区全景（北西側よりのぞむ）
	2	不入窯跡調査区全景（南東側よりのぞむ）
	3	不入窯跡トレンチ配置状況（北西側よりのぞむ）
	4	不入窯跡トレンチ配置状況（西側よりのぞむ）
図版 5.	1	不入窯跡第 4 トレンチ B～G 区発掘状況（北東側よりのぞむ）
	2	不入窯跡第 2 トレンチ B～H 区発掘状況（東側よりのぞむ）
	3	不入窯跡第 6 トレンチ L・M 区土層断面（南側よりのぞむ）
図版 6.		永田窯跡出土遺物
図版 7.		不入窯跡出土遺物
図版 8.	1	永田窯跡第10トレンチ A 区土層断面（北西側より）
	2	永田窯跡第11トレンチ K 区土層断面（南西側より）
	3	不入窯跡第 3 トレンチ D 区土層断面（北側より）
	4	不入窯跡第 3 トレンチ H 区土層断面（南側より）
	5	確認トレンチ出土須恵器

I 調査に至る経緯と調査経過

1. 調査に至る経緯

市原市久保地区における圃場整備事業の着工にさきがけ、昭和55年5月15日付けで、市原市長 井原恒治より、事業地域の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会が、千葉県教育委員会教育長及び市原市教育委員会教育長宛に提出された。それを受けて、現地踏査を実施した結果、昭和55年7月25日付けで、千葉県教育委員会教育長より須恵器窯跡1カ所の回答が得られた。その取扱いについて千葉県教育庁文化課、千葉県市原土地改良事務所、高滝ダム周辺整備対策室、市原市加茂土地改良区並びに市原市教育委員会による再々の協議の結果、現状保存地区については確認調査、その他の地区については記録保存とする結論とされた。

調査は、現状保存区域約3,000㎡の内10%（約300㎡）の確認調査を文化庁の国庫補助事業として昭和59年10月29日より開始した。
(市原市教育委員会文化課)

2. 調査の経過

発掘作業

昭和59年10月29日調査を開始した。前日の降雨によって永田窯跡は冠水状態にあったため、水はけが比較的良好な不入窯跡にトレンチを設定し、発掘を始めた。

10月30日より不入窯跡の土層断面実測を開始した。

11月5日から、水が引いてきた永田窯跡の発掘を開始した。天候が良好なうちに永田窯跡の調査を進めておく必要から、不入窯跡の調査を一時中断し永田窯跡の調査を優先して行なった。

11月10日より永田窯跡の土層断面実測を開始した。

11月19日から、再び冠水した永田窯跡の調査を中断し、不入窯跡の調査を再開した。

11月22日で不入窯跡の調査を終了し、永田窯跡の調査を再開した。

11月30日をもって発掘調査をすべて終了した。

整理作業

昭和59年12月1日から遺物の水洗、注記、復元作業を開始し、1月8日までにこれを終了した。

昭和60年1月16日までに遺物の実測、写真撮影、トレース及び表類の作成等を終え、挿図・写真図版の作成を始める。

2月28日すべての挿図・写真図版の作成及び原稿の執筆を終え、整理作業は終了した。

Ⅱ 遺跡の位置と地理的環境

市原市は千葉県の中央南西寄り、房総半島の西側の付け根付近に位置している。地形的には北部に洪積世台地（下総台地）が、南部に丘陵地帯（上総丘陵）が広がり、これらは中央部を南から北に向かって流れる養老川によって開析され、両岸に沖積低地と河岸段丘が形成されている。

この養老川は、北部下流域では、比較的広く連続した洪積世河岸段丘面と沖積地を両岸に形成しているが、支流である古敷谷川との分岐点を境として南部中・上流域では、両者ともに小規模・不連続になるとともに沖積世面の段丘化も顕著となり、しだいに川幅が狭く、谷を深く刻む溪谷状を呈するようになる。また、養老川の最も大きな特徴としては著しい曲流（メアンダー）とそれに伴う流路変遷のはげしさがあり、河岸段丘の在り方を複雑かつ多様にしている。

永田・不入窯跡は、古敷屋川との分岐点より約1km下流の中流域東岸にあり、北西から南東方向に伸びる鳥の頭に似た形状の洪積世低位河岸段丘面上に位置する。この段丘面は周囲を古い川跡によって囲まれ、鳥の頭の首にあたる部分を現在の養老川沖積地によって切られており、その規模の大きさと、景観の良さから、典型的な「曲流・短絡地形」として知られている。この分断された段丘面は鳥の頭の口にあたる部分に、久保浅間山として中位の段丘面があり、嘴の先端に向かってしだいに低くなっていく。窯跡は、嘴の根本付近にこの台地を挟んで南側斜面と北側斜面とにあり、前者が永田窯跡、後者が不入窯跡である。

現在水田となっている川跡を見ると、旧養老川は現在の中島池付近から北東流し、永田窯跡の前面で90°曲流して南東に向い、ふじ山前面で180°方向転換し、小規模に曲流しながら不入窯跡前面を通して北西方向に流れていったものと思われる。永田窯跡付近は流路が約90°方向を変える位置に造られており、立地する斜面は侵食の著しい「攻撃斜面」となっている。つまり対岸から緩やかな階段状に下ってきた水田面が斜面直下で最も低くなり、斜面は比較的比高差があって急な勾配で立ち上っている。また不入窯跡は、永田窯跡側からの流れが180°方向を換えてからの「滑走斜面」側に造られており、水田面は、今回の調査区を最高位として対岸に向かって緩やかに傾斜している。ただ不入窯跡が立地する部分は小規模な曲流の外側にもあたり、付近の斜面と比べ、比高差があり、勾配も急なものとなっている。

この様に見ていくと、両窯跡の立地は比高差があって、勾配も比較的急である点で共通している。また、こうした地形は永田段丘においては限られており、窯の造設にあたっては地形を選んで行なわれているものと思われる。このことは不入窯が日当の著しく悪い北東斜面側にあえて造られていることの理由ともなろう。

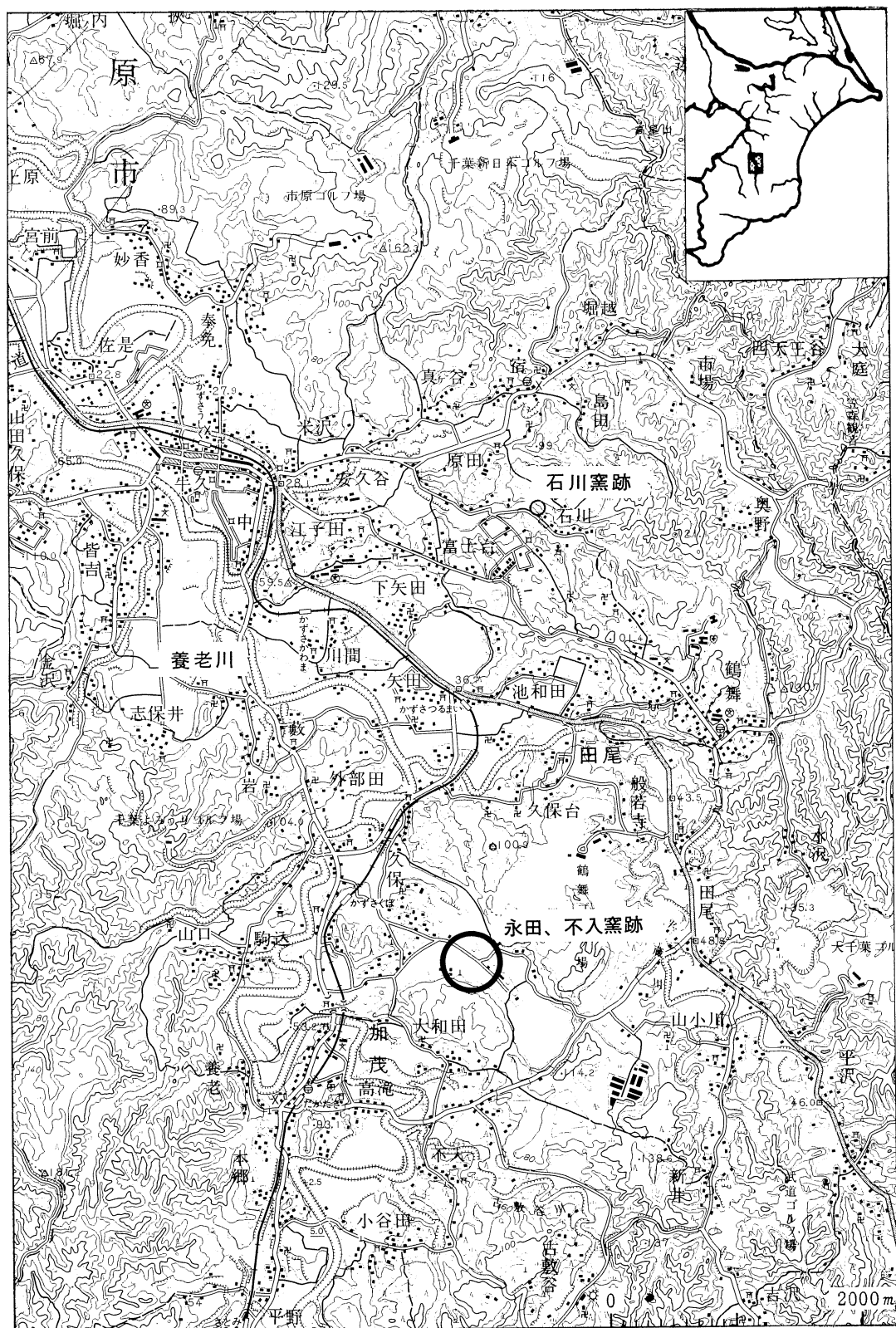


圖1 永田、不入窯跡周辺地形及び関連遺跡分布図

(1 : 50,000)



图2 永田、不入窯跡周辺地形図

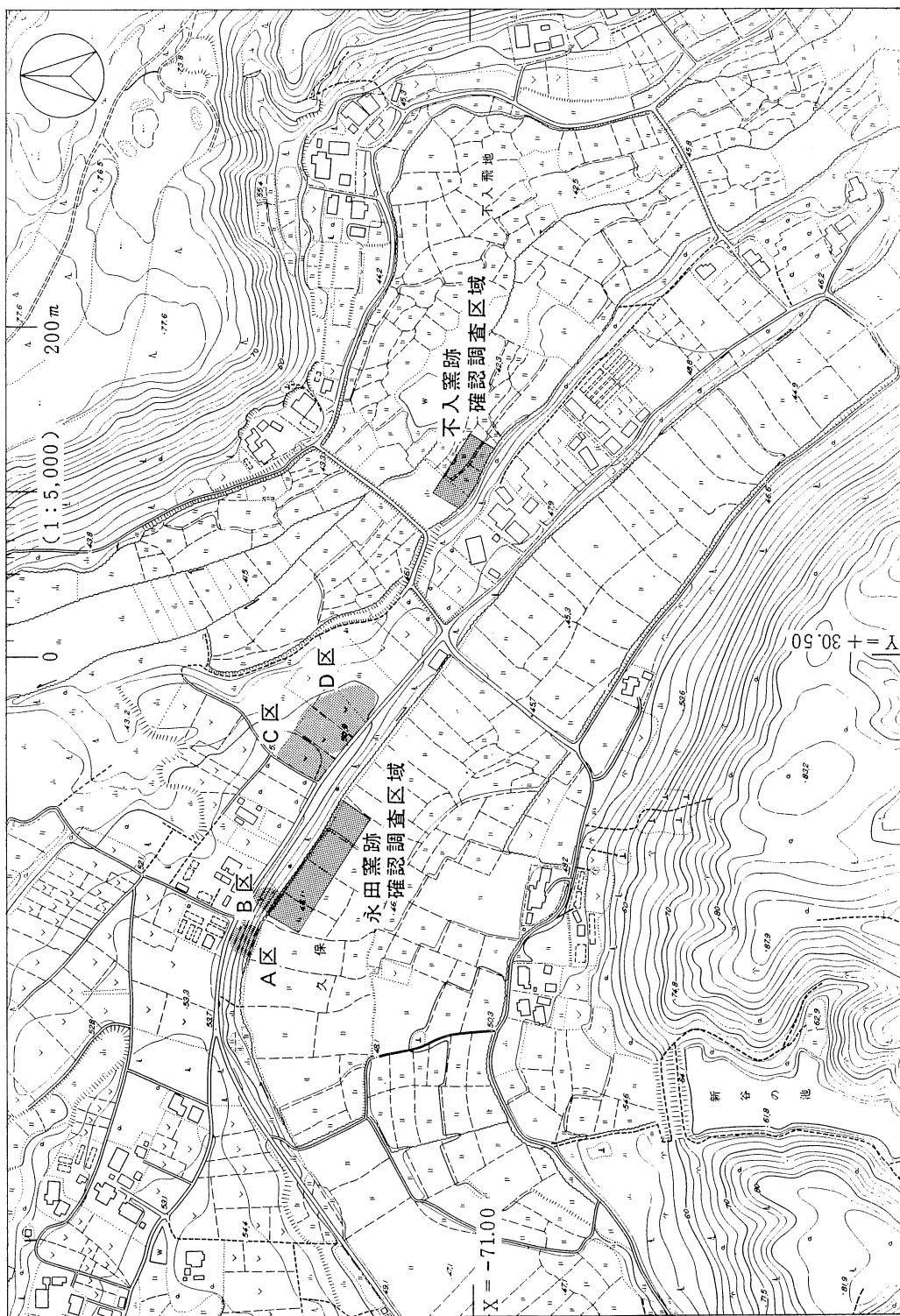


図3 永田、不入窯跡周辺地形及び調査区域位置図

Ⅲ 遺跡の歴史的環境

永田，不入窯跡が，この養老川中流域に造営された理由については，これを当地域（養老川中流域）の歴史的背景に直接求めるか，あるいは須恵器生産のもつ技術的要因からくる地理的環境を重視するのか現段階では断定できない。しかし，このことは本窯跡の性格そのものに係わることであり，将来，明らかにされなければならない。この場合，まず，永田，不入窯跡出土遺物との対比から供給地先（出土遺跡）を把握し，その遺跡の性格がどのようなものであるのか（寺院，官衙，農業生産集落，その他の生産集団集落など），また，編年上のどの段階の遺物がどの位の量供給されているのか，あるいは，出土遺跡が各段階でどのような分布を示すのかといった事を検討しなければならず，こういった作業を元に生産主体及び生産の目的を明らかにすることが必要となろう。

ただ，このことについては，すでに須田勉氏によって「国分寺運営上必要な仏器，日常汁器を確保するために成立したものであり……窯の設定そのものを国分寺造営事業の一環として把え」という性格付けがなされている。しかし，国分寺，国分尼寺，荒久遺跡，坊作遺跡といった国分寺関係の遺跡群から出土している永田，不入，（石川）窯の製品にどの段階のどのような器種がどれだけ入り込んでいるかということが明らかでなく，断定はできない。また，国分寺の運営に係わる須恵器の供給という契機があったとしても，国分寺以外の官衙，集落にどのように搬入しているかを知ることは，該期の社会構造を考える上で有力な手がかりとなろう。

本章においては，上述のことまでは言及できないが，以下，永田，不入，石川窯と思われる製品を出土している遺跡を掲げておきたい。

袖ヶ浦町（清水川台）^{註1}，市原市（藪・南総中学・萩ノ原・池ノ谷・坊作・宮前・草刈）^{註2}，千葉市（大道・荻生道）^{註9}，東金市（山田水吞）^{註11}，佐倉市（江原台・臼井南）^{註12}。この他に，千葉市・大網白里町・東金市などに未報告のものが数ヶ所ある。

註1 佐久間豊他 1983「清水川台遺跡発掘調査報告書」

註2 石本俊則他 1983「市原市藪遺跡」

註3 倉田芳郎他 1978「千葉・南総中学遺跡」

註4 田口 宗他 1977「千葉県萩ノ原遺跡」

註5 1983年度市原市文化財センター調査 未発表資料

註6 須田 勉 1977「上総国分寺台発掘調査概要Ⅳ 坊作遺跡の調査」

註7 対島郁夫他 1976「市原市宮前遺跡」

註8 小久貫隆史 1980「千原台ニュータウンⅠ」

註9 白石 浩・榊原弘二 1983「千葉市大道遺跡・生実城跡発掘調査報告書」

註10 倉田義広 1983「千葉市域における奈良・平安時代の土器について」『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』

註11 松村恵司他 1977「山田水吞遺跡」

註12 高田 博他 1977「佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書Ⅰ」

註13 熊野正也・伊札正雄 1975「臼井南」

Ⅳ 永田、不入窯跡調査研究の沿革

永田、不入窯跡は 1974 年 3 月 13 日から 4 月 18 日まで、国士館大学考古学研究室によって確認調査が実施され、1976 年 3 月に報告書が刊行された。この調査において、地下式及び半地下式無階無台登窯を含む窯跡が、永田で 14 基、不入で 4 基確認され、皿、杯、有蓋高台付杯、碗、有蓋高台付碗、盤、高台付盤、脚付盤、蓋類、鉢類、多嘴瓶、有蓋短頸壺、瓶、平瓶、横瓶、水瓶、甕、甑、圈脚円面硯、紡輪、瓦などが出土した（図 4 参照）。また、その時期については、「永田 3 号と 14 号のものが若干古い感じ」をもち、次に「永田の 1 号、5 号、不入の 4 号」が全盛期として「比較的永く操業」され、その終末として「不入の 3 号、4 号、永田の 13 号などが操業」されたとし、全盛期を「8 世紀中葉から 9 世紀初頭の頃」とした。^{註1}

永田、不入窯跡は県内唯一の 8 世紀代の須恵窯跡として注目され、以後多くの論考がなされている。以下このうち、その性格、須恵器の形態分類、実年代に言及しているものについて簡略に触れておきたい。また関連する石川窯についても参考として掲げておきたい。

1977 年に上総国分尼寺に隣接する坊作遺跡が調査され、この概報の中で、須田勉氏は、窯の「設定そのものを国分寺造営事業の一環として捉え」、その「成立時期の上限を国分寺建立の認が発布された 741 年」とした。^{註2}

1978 年刊行の東金市山田水呑遺跡調査報告書においては、同遺跡出土の杯を底部の回転ヘラ削りの在り方で 4 類に分け、一方この「調整範囲が、底部全面及び体部下端から、底部外縁部のみのものへという漸移的な変化を認めることが出来る」とした。また、その実年代については出土土器全体の編年の中で捉え、後述の石川窯製品と思われるものも含めて 8 世紀前葉～9 世紀前半とした。^{註3}

1978 年に刊行された市原市南総中学校遺跡においては、新たに発見された「石川窯跡」が報告されその製品は「水瓶を焼いていることから、永田、不入窯跡の製品と同様、国分寺等へ供給された」ものと性格づけられた。その出土須恵器のうち、回転糸切り離し無調整の杯を他の地域の窯との関係から 9 世紀前半～後半以降とし、永田、不入窯を経て石川窯跡への系譜が考えられる」とした。^{註4}

1981 年には国平健造氏が南関東地域の窯跡の編年を行なったが、永田、不入窯跡についても遺構の在り方から土器の具体的な編年を行ない、その操業時期については北武蔵の窯跡群との関係から 8 世紀第 2 四半期後半～第 3 四半期前半とした。また、出土遺物の相違から永田窯跡群を主に民間窯的性格を帯びたもの、不入窯跡群を官窯的性格を更に強くもった窯として捉らえている。尚、石川窯跡については 9 世紀初頭以降としている。^{註5}

1983年に刊行された袖ヶ浦町清水川台遺跡調査報告書においては、永田、不入窯の製品と思われるものを、口縁部及び底部からの立ち上がりの在り方、底部調整の方法などから大きく4つに分類した。また、その年代については、山田水呑遺跡の実年代を全体に押し下げる形をとり、出現期を8世紀中葉以降としている。^{註6}

1983年に行なわれた、房総における奈良・平安時代の土器についてのシンポジウムでは、永田、不入窯跡は実年代決定の根拠とされ、やはり国分寺造営との関係、あるいは埼玉県前内出窯跡との関係により8世紀第3四半世紀としている。また、石川窯跡については9世紀第2四半期～第3四半期とした。^{註7}

また、1984年に刊行された千葉県文化財センター研究紀要8においては胎土分析が行なわれ永田、不入、石川窯跡と同時期の他地域の窯との区別が可能であることが指摘された。尚、石川窯跡における遺物採集時に3基の窯が確認されている。^{註8}

1984年、佐久間豊氏と井口宗氏によって石川窯跡の新資料が紹介され、操業年代を北武蔵の窯との関係の中で9世紀第2四半期とし、永田窯跡についてはやはり前内出窯との比較から、8世紀第3四半期後半ないし第4四半期前半～9世紀第1四半期前半頃とした。また、永田、不入窯から石川窯へ継続的な移動があったとし「上総国分寺に供給することを主目的としたこの地域における須恵器生産は停止すること」はなかったとしている。^{註9}

以上の様に永田、不入窯跡については、その操業年代を石川窯をも含め8世紀中頃から9世紀前半の間に置くことでほぼ一致しているものの、土器の具体的分類による編年は不明確である。これは、永田、不入窯の操業期間が非常に短いことと、南武蔵、常陸地域などの窯跡群から孤立した存在であったため、器形変化があまりなされなかったためと思われる。しかし、時間差による器形のバラエティーは明らかにあり、消費地での細かい分析を通しての編年が期待される。また、永田・不入窯跡の祖形となった窯跡の追求が、その性格及び編年、実年代を知る上で必要な作業となろう。

註1 大川 清 1976「千葉県市原市・永田、不入須恵窯跡」報告書

註2 須田 勉 1977「上総国分寺台発掘調査概要Ⅳ 坊作遺跡の調査」

註3 松村恵司 1977「出土土器の分類と編年」『山田水呑遺跡』

金子真土 1977「出土土器に関する二・三の問題」『山田水呑遺跡』

註4 酒井清治 1978「遺跡周辺の採集遺物 石川窯址」『千葉・南総中学遺跡』

註5 国平健造 1981「相模国の奈良・平安時代集落構造（上）」『神奈川考古 第12号』

註6 佐久間豊 1983「考察 出土土器について」『清水川台遺跡発掘調査報告書』

註7 佐久間豊・豊巻幸正・笹生 衛 1983「旧上総国における奈良・平安時代土器編年試案」『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』

註8 三辻利一 1984「千葉県内出土須恵器・埴輪・瓦の胎土分析」『千葉県文化財センター 研究紀要8』

註9 佐久間豊・井口 崇 1984『千葉県市原市石川窯址における表面採集の須恵器』『史館 第16号』

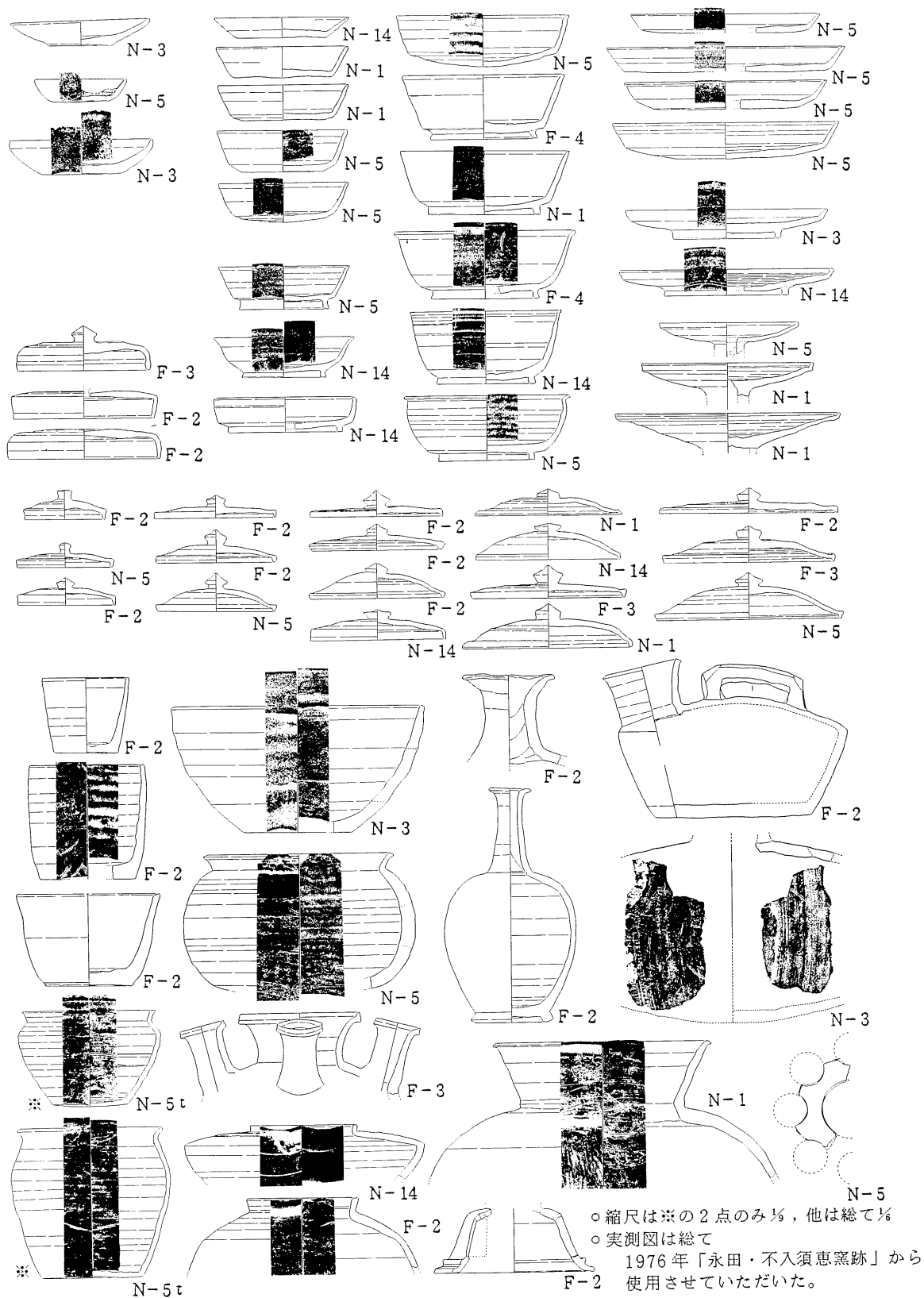


図4 1974年調査時の主な出土須恵器*

V 調 査 の 方 法

1. 発掘の方法

確認調査が目的となるため発掘は総てトレンチ法によった。トレンチは公共座標値が明らかな10m方眼の任意座標を元に、台地縁辺と直行する方向に設定された。永田窯跡はトレンチを11本設け、北西側から南東側に向って第1～第11トレンチと呼ぶこととし、各トレンチを台地斜面直下から南西側の対岸に向って2mごとに区分けを行ない、これをA～M区とした。また、不入窯跡は6本のトレンチを設け、北西側から南東側に向って第1～第6トレンチとし、やはり台地斜面直下から北東に向って2mごとにA～Mに区分をした。(第1トレンチA区=1Aとする)。

1本のトレンチは、これを全面に恒って掘り下げることとはできず、台地斜面直下、調査区端部、及び両者の中間点の3地点を基本として、長さ4mの小トレンチを設けた。水田面の調査で、トレンチ壁面が崩壊の恐れがあったため、小トレンチ内を螺旋階段状に掘り下げていき、最深部において遺物包含層を掘り抜く様にした。このため各区ごとの深さが一定せず、出土量の比較資料としては不十分なものとなってしまった。尚、トレンチは総て、ジョレンと円匙によって手掘を行なっている。

出土遺物は本来各層毎に集計されるべきであるが、調査中の土層は水を多量に含んで泥化しており、出土層位の確認は困難であった。このため表土から下方に一定の厚さで数回に分けて掘り進め、各段階内で一括して取り上げ、整理の段階で各層との対比が可能なように各段階の高さを記録しておいた。

トレンチの土層断面は総て実測することを基本としたが、永田窯跡の一部は調査中に崩壊してしまいきななかった。

2. 整理の方法

今回の確認調査において出土した遺物はほとんどが小破片であり、各器種毎の器形変化を統一的に分類するには至らない。よって本報告においては未報告器種の発見及び各トレンチ毎の器種別出土傾向など、前回の報告の補足的資料の題示に努めた。

各グリッド毎の器種別出土数は総を掲げることができなかったもので、斜面に立地する窯の影響を強く受けていると思われる最も斜面寄りの区域と、包含層の範囲を決定する調査区外縁部の区域とに限りて表を作成した。但、出土遺物は総て目を通しており、必要なものは実測、拓本を行なった。

図化した遺物の選択については、特に基準はなく、新発見及び比較的出土量が少ない器種を中心に掲げた。

Ⅵ 永田窯跡の調査

1. 基本層序と調査区内の分布（図3，5，11，12）

永田窯跡の灰原部についての確認調査対象地区は、窯跡群前面の水田面にあたり、台地際に沿った幅20m，長さ100mの範囲である。調査方法はⅤ章に既述した通りである。

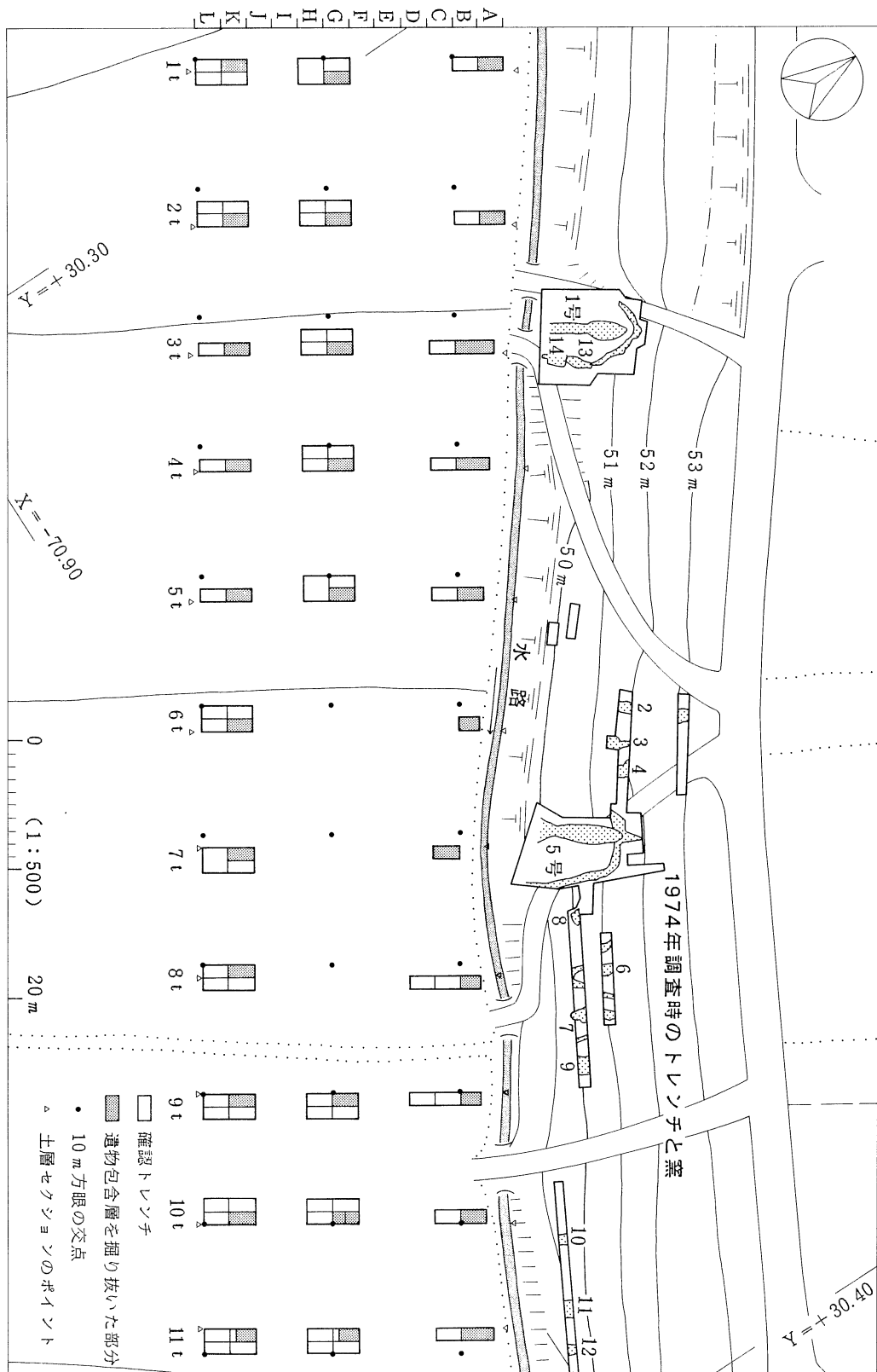
基本土層は上から，Ⅰ層－現在の攪乱耕作土，Ⅱ層－近世の攪乱耕作土，Ⅲ層－時期不明の耕作土，Ⅳ層－須恵器を多く含む自然堆積層，Ⅴ層－砂性の強い地山、であり、各層の特徴については図12中に詳述した。このうちⅣ層が、「灰原」として捉えられる。ただ、窯壁片，炭化物，須恵器片が多量に混在する本来の「灰原」と言えるものは、各トレンチの台地斜面寄りの部分に限られ、他は須恵器が主となり、出土量も減って「遺物包含層」と呼ぶべきものになる。いずれにしてもⅣ層は本来、窯の本体と一体であり、細分化された各層と出土遺物との関係を把握することは、本窯跡群の生産形態を知る上で重要である。

各トレンチの小区における基本層位と須恵器の器種別出土量との関係を示したのがP13・14の表である。この表からは、台地斜面の窯跡群の在り方と、トレンチ出土遺物量とがほぼ対応していること、台地斜面際から離れるに従って出土量が減っていくことが判る。（9KのⅡ層が多いのは近世に一括投棄されたのであろう）。

2. 出土遺物（図6，7）

今回の調査で出土した遺物の内、特徴的なもの及び遺存状態の良いものについて図化を行なった。これを概説すると、5～7は極めて小径の蓋で、8～11の小型短頸壺（薬壺）に対応するものであろう。前者は永田窯中に既報告例があるが、後者は不入にやや大型のものが出土していただけである。14と15は波状文が見られる。非常に整った施文の仕方であり、本窯に伴うものかどうかは断定できない。16～18は円面硯の脚台部で、いずれも別個体である。既報告の不入窯出土例と同様下部に突帯をもつ。永田窯においては初見である。19～21は女瓦で他に11Aの6層で1点出土している。このうち19は高台付杯が付着しており、他のものも含めて焼台として利用されたことが判る。瓦の出土は永田窯では初見で、4点とも11トレンチA・B区からの出土である。22は杯3点の重ね焼資料である。この他、図示はしていないが、杯底部の破片で回転糸切り後無調整のものが1トレンチに限って6点出土している。（A・G・K区，各2点づつ），永田5号窯で3点の既報告例がある。

また、前述の出土数一覧表のA～C区部出土の高台付杯・高台付碗と蓋との出土数を比較すると、前二者の底部片（c + e）の合計118点と後者の口縁破片数（b）193点は他の器種をも含めた全体の中では、比較的近似した数値であり、蓋類の大部分が高台付杯、碗とセットとなることを示している。



永田窯跡，確認トレンチ出土須恵器片出土数一覧表

ト レン チ	土 層	杯 類										蓋 類					特殊・大型製品					合 計			
		口 縁				底 部						不 明	口 縁			ツ マ ミ	不 明	長 盤 脚	甕	壺	鉢		碗	不 明	
		a	b	c	d	a	b	c	d	e	f		a	b	c										
1 A	I											2													2
	II																								
	III									1															1
	IVa							1				4													5
	IVb		1					1	1			15		2									1		21
2 AB	IVc		2					1				2													5
	I, II		2	1			1					7					4								16
	III, IVa		5									17		1				1							26
	IVb		6		1		7	1				17		2			5	2	1						45
	IVc																								
3 B	I		5				2	1				3				1	2								2
	II		8				9	2		1		18		1					1						4
	III		15				9	3				28		3			1		1						1
	IV		51	2			23	5				62		10		1	1		1						3
																									159
4 B	I		2																						
	II																								
	III, IV		3				2	2				12		1									3		23
5 B	I, II		1									5		1			1		3						1
	III, IVa		1					2				4		1									1		9
	IVb, IVc						1					2							1	1					5
6 B	I		6	1			2					9							1						5
	II		65	5	10		21	8		1		420	1	35		8	20		13	1		2			8
	III		16	4			3	8			1	82	2	10		1	5	2	5	2					2
	IVa		13	4	2		7	10		1		74		10			3		1						7
	IVb, IVc		1	1			3			1		10				1							20		37
7 C	I		3																						
	II, III		19	2	4		4	7			1	84		11		1	1		3	1					6
	IV		78	12	13		12	12		2		212	1	42		3	7		5	1	1		12		413
8 B	I						1	2		1		14		1						1					1
	II		4				6			6		43		7		1	1		2						2
	III		13	1			4					34		4					1						1
	IVa	1	6				4	4																	55
9 B	I		7				4	2				15		4			3		1						2
	II		7	1		1	2	1				18		1			2		1						7
	III		18	2	1		18	2				51	2	11		2	9		3						13
	IVa		1				2	1				2													6
10 B	I		2	1			2	1				1					1		1						9
	II	1	21	2		16	9			1		89		10		2	3		1	2					11
	III		43	4			28	7				100		10											4
	IVa, d		40	5	2		34	8				109	1	11		2	1	1							214
	IVb, c		15	1			14	4		2		25		1		1	5	1	1						2
11 A	I																								
	II		4				1					4								1					
	III		3				2	3				6		1		1	1						2		19
	IVa, a', b		2	1	1		2	2				6		2		1	2		1				1		21
	IVc		5	2			6					8					1								22
合 計		2	494	52	34	17	244	100		17	2	1,614	7	193		28	79	9	48	9	2	2	127	3,080	

註 「確認トレンチ出土須恵器片出土数一覧表」における器種分類の略号の説明

杯類口縁（a＝皿，b＝杯と高台付杯，c＝碗と高台付碗，d＝盤と高台付盤）

杯類底部（a＝皿，b＝杯，c＝高台付杯，d＝碗，e＝高台付碗，f＝盤）

蓋類口縁（a＝小径の蓋，b＝高台付杯と高台付碗の蓋及び長脚盤の口縁を含む可能性がある。c＝短

頸壺の蓋）

永田窯跡，確認トレンチ出土須恵器片出土数一覧表

ト レ ン チ	土 層	杯 類										蓋 類					特殊・大型製品					合 計		
		口 縁				底 部						不 明	口 縁			ツ マ ミ	不 明	長 脚 盤	甕	壺	鉢		硯	不 明
		a	b	c	d	a	b	c	d	e	f		a	b	c									
1 K	I II III,IVa IVb IVc V		1 3 1				1 1 1	1				2 9 7 4		2						1			1	6 14 9 7
2 K	I II III IVa IVb IVc V		4 3 9	1			1 1 1					11 8 4 20 1		2 1 2					1		1		1 2 1 33 4	20 13 7 33 4
3 K	I～III IV V		1 2				4 3	1				4 11		1								1	9 19	
4 K	I～III IVa IVb IVc V											2 11			1					1			2 16	
5 K	I,II III IV V		1 2 1				1 1	1 1				1 2 5							1				3 5 8	
6 K	I II III,IVa IVb,IVc V	1	4 4	1			2 2	1 1 1			3	24 9 10		4 1 1			1 4 2		1 1			3 1	40 23 19	
7 K	I II III IVa IVb IVc V						1 1 6	1 1 3				4 35					4 6 2			1 1		1 1	6 5 9 66	
8 K	I II III IVa IVb IVc V		1 2 8 2	1 1			1 1		1	1		1 4 18 12 9		1 2 2				2		1 1	2	1 26 26 20		
9 K	I II III IVa IVb IVc V		9 4 17 2				2 2 3 1	1 1 4				71 19 17 41 13		3 4 1 4 2		1		1		5 1 1	1	3 1 1	90 34 22 67 25	
10 K	I II III IVa IVb		5 1				3					1 13 1		1 1			1 6		2	2		2 1	3 28 9	
11 K	I II III IVa IVb IVc V						1 1	1				1 3 1										1 5 3		
合 計		2	102	7			40	22	1	4	1	409	5	38		3	28	1	17	7		1	22	710

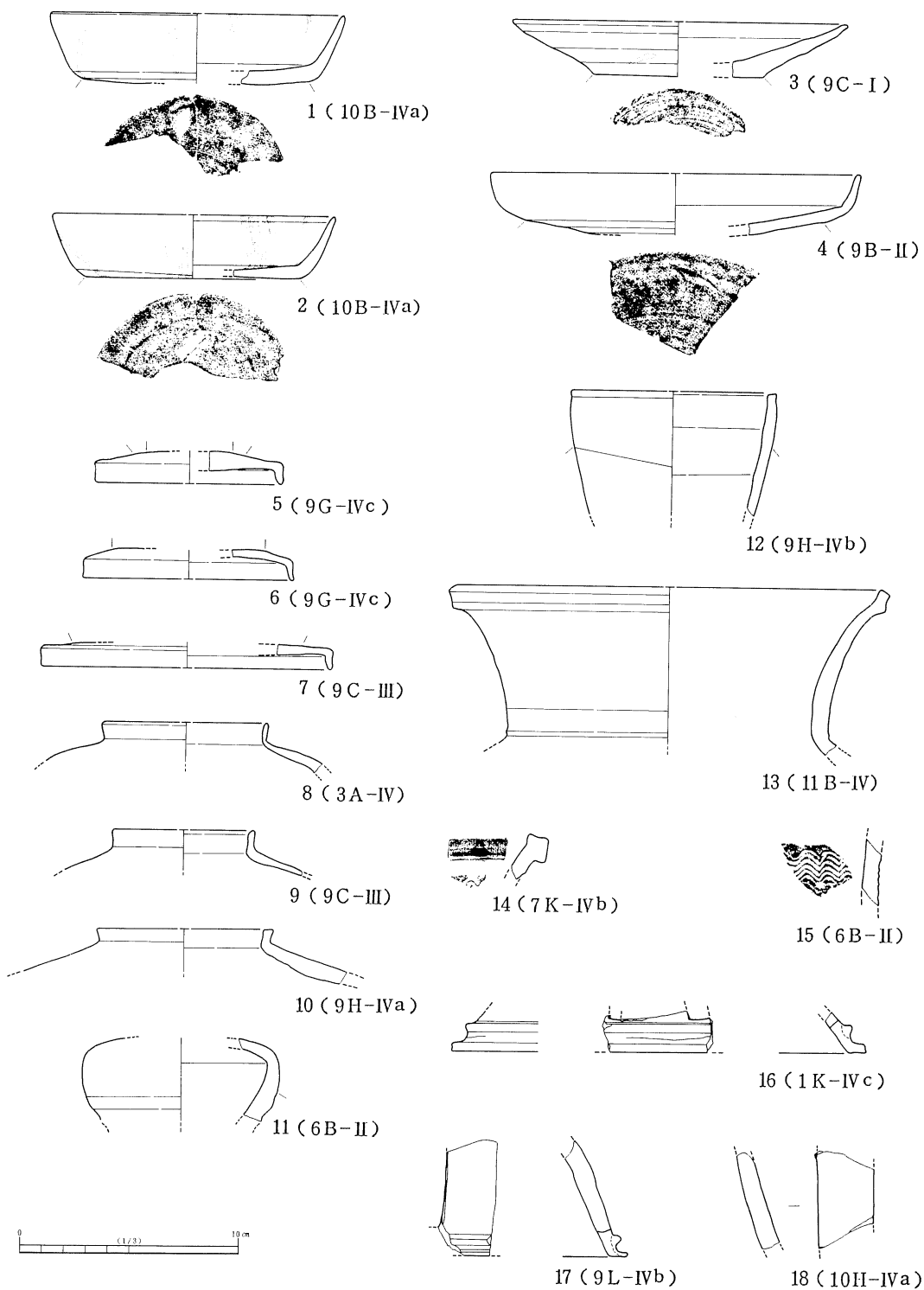


図6 永田窯跡、確認トレンチ出土遺物(1)

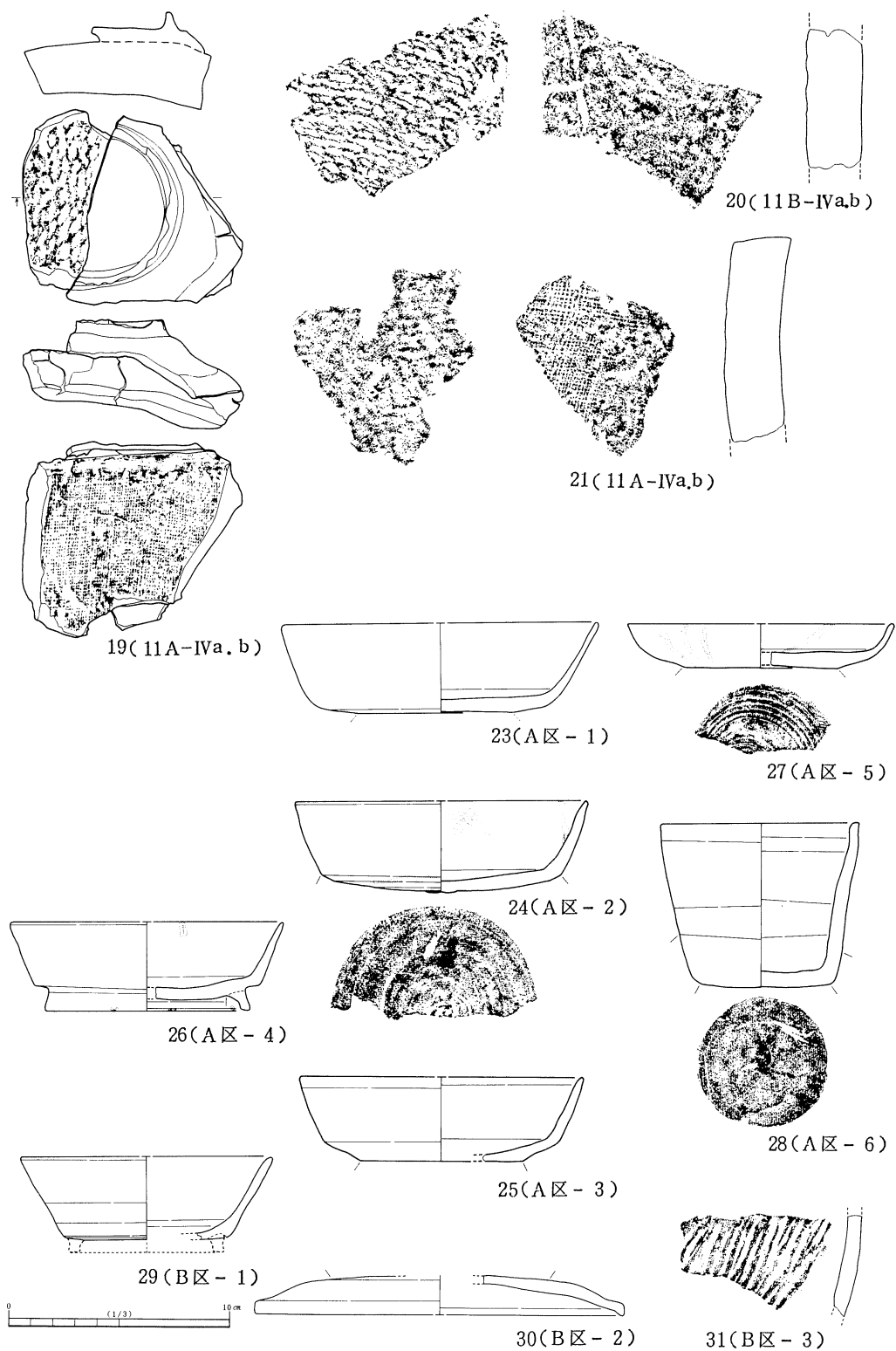


図7 永田窯跡、確認トレンチ出土遺物(2)

永田窯跡土器表

土器番号	出土位置	器形	法量	遺存率	器形の特徴	成形・調整	胎土	焼成	色調
図-1	10B-Na	杯	(133) (104) (33) —	口縁部 ^{1/4} 底部 ^{1/5}	体部は直線的に外傾して立ち上る。	底部は全面回転ヘラ削り調整。ロクロ右回転。	白色細砂粒を少量、黒色粒を若干含む。	堅緻。内外面に火癖、重ね焼の痕が見られる。	内外面、明るい青灰色。重ね焼痕は黒灰色で斑状の剥離が見られる。
-2	10B-Nb	杯	(127) (98) (29) —	口縁部 ^{1/4} 底部 ^{1/5}	体部はやや内湾気味に立ち上り、口縁部で僅かに外反する。口唇は内側に傾斜する稜を作る。	内面の立ち上り部は指の押さえによる爪の痕が見られる。底部は全面回転ヘラ削り調整。ロクロ右回転。	白色細砂粒を若干含む。	堅緻。内外面に火癖が、外面に重ね焼の痕が見られる。	内外面、くすんだ青灰色。重ね焼痕は黒灰色。
-3	9C-I	皿	(153) (73) 25 —	口縁部 ^{1/4} 底部 ^{1/4}	底部から緩やかに体部は立ち上り、中位で僅かに内湾して口唇に至る。	底部は全面回転ヘラ削り調整。ロクロ左回転。	白色細砂粒を少量、雲母粒、白色砂粒を若干含む。	堅緻。外面に火癖、内外面に重ね焼の痕が見られる。	内外面、水色がかった青灰色。重ね焼痕は黒灰色。
-4	9B-2	盤	(167) (80) (27.5) —	口縁部 ^{1/4} 底部 ^{1/5}	底部外縁部はやや立ち上るため、底部は丸底風をなす。体部は内湾気味に立ち上る。口唇は丸味がある。	内面の立ち上り部は指の押さえによる爪の痕が見られる。体部下端から底部外縁にかけて、指のアテによるナデ整形がされ、底部切り離し跡は全面回転ヘラ削り調整。ロクロ左回転。	白色細砂粒、黒色粒、雲母粒を若干含む。	堅緻。外面に重ね焼の痕が見られる。	内外面、白味がかった青灰色。重ね焼痕は黒灰色。
-5	9G-Nc	蓋	(85) — 不明	口縁部 ^{1/4}	外面は天井部から緩やかに裾部に至る。端部は、厚味があり、僅かに外傾する。ツマミを欠く。	天井部外面は回転ヘラ削り調整され、ツマミ付近はナデられている。ロクロ回転不明。	白色細砂粒を若干含む。	堅緻。外面に重ね焼の痕が見られる。	内外面、極めて明るい青灰色。重ね焼痕は淡い黒灰色で斑状の剥離が見られる。
-6	9G-Nc	蓋	(96.5) — 不明	口縁部 ^{1/4}	外面は天井部から緩やかに裾部に至る。端部は僅かに外傾する。ツマミを欠く。	外面は全面にナデを施す。ロクロ回転不明。	白色細砂粒を若干含む。	堅緻。外面に重ね焼の痕が見られる。	内外面、白味がかった明るい青灰色。重ね焼痕は淡い黒灰色で斑状の剥離が見られる。
-7	9C-III	蓋	(131.5) — (12) —	口縁部 ^{1/4}	外面は平坦である。端部は僅かに外傾する。ツマミを欠く。	天井部外面は回転ヘラ削り調整。ロクロ回転不明。	白色、黒色細砂粒を若干含む。	非常に堅緻。	内外面、灰色。口縁部内面は淡い黒灰色で斑状の剥離が見られる。
-8	3A-IV	短頸壺	(75) 不明 不明	口縁部 ^{1/4}	口縁部は薄く丸味をもった肩部から垂直に立ち上がる。端部は、丸味をもつ。	内外面は丁寧なナデが施される。ロクロ回転不明。	白色、黒色細砂粒を若干含む。	非常に堅緻。肩部内外面に自然軸が付着。	内外面、明るい灰色。内面の一部は黒灰色。内外面に淡緑色の軸。
-9	9C-III	短頸壺	(64) 不明 不明	口縁部 ^{1/4}	口縁部は薄くやや張りをもった肩部から、垂直に立ち上がる端部は、内側にやや傾斜する。	内外面は丁寧なナデが施される。ロクロ回転不明。	白色細砂粒を若干含む。	非常に堅緻。肩部外面に自然軸が付着。	内外面灰色。肩部外面に濃緑色の軸。
-10	9H-Na	短頸壺	(81) 不明 不明	口縁部 ^{1/4} 肩部 ^{1/5}	肩部は張りをもち、口縁部は、僅かに、外傾するがほぼ垂直に立ち上る。端部は平坦。	内外面は丁寧なナデが施される。ロクロ回転不明。	白色細砂粒を若干含む。	非常に堅緻。	内面淡灰色、外面淡い青灰色。
-11	6B-II	壺	肩部径 (90.5)	肩部 ^{1/5}	小形の壺である。やや張った肩部から、次第に内傾する体部へと至る。体部下半は凹凸をなす。	内外面は丁寧なナデが施されている。ロクロ回転不明。	白色細砂粒、黒色粒を少量含む。	非常に堅緻。	内面は淡黒灰色、外面は黒灰色を基調とする。内外面白色の斑状剥離が著しい。
-12	9H-Nb	鉢	(93) 不明 不明	口縁部 ^{1/4}	体部は内湾気味で、平坦な端部に至る。口縁部外側には、弱い沈線が付く。	体部中位まで回転ヘラ削り調整。ロクロ左回転。	白色細砂粒、黒色粒をまばらに含む。	非常に堅緻。	内面は明るい青灰色。外面は黒灰色。
-13	11B-IV	甕	(195) 不明 不明	口縁部 ^{1/4}	口縁部は強く外反する。	内外面は丁寧なナデが施される。ロクロ回転不明。	白色細砂粒をまばらに白色砂粒を若干含む。	非常に堅緻。外面に自然軸が付着。	内面は淡い黒灰色を基調とし、白色の斑状剥離が著しい。外面は緑がかった黒色。断面淡紫色。
-14	7K-Nb	甕	不明 不明 不明	口縁部破片	外面には波状文の一部が見られる。	ロクロ回転不明。	白色細砂粒を少量含む。	堅緻。	内外面、明るい青灰色。
-15	6B-II	甕	不明 不明 不明	頸部破片	外面に波状文が施されている。	ロクロ回転不明。	白色、黒色細砂粒をまばらに含む。	あまい。	灰白色。
-16	1K-Nc	円面碗	不明 (189.5) 不明	台脚部 ^{1/4}	台脚部下位に1条の隆帯が付く。透し孔は2箇所残存している。(幅左約5mm、右約9mm)	透し孔は切り抜かれている。隆帯は貼り付けである。台脚部下位に縦縞み痕が見られる。ロクロ回転不明。	白色、黒色細砂粒を若干含む。	堅緻。	内面明灰色、外面淡い黒灰色。
-17	9L-Nb	円面碗	不明 不明 不明	台脚部破片	台脚部下位に1条の隆帯が付く。破片の片側は透し孔の痕と見られる。	隆帯は貼り付けである。ロクロ回転不明。	白色細砂粒を若干含む。	非常に堅緻。内面に自然軸が付着する。外面黒灰色。断面淡紫色。	内面、紫がかった灰色、濃緑色の自然軸付着。外面黒灰色。断面淡紫色。
-18	10H-Na	円面碗	不明 不明 不明	台脚部破片	破片の両側は透し孔の痕と見られる。	ロクロ回転不明。	白色細砂粒を若干、黒色粒をまばらに含む。	非常に堅緻。外面及び透し穴側面に自然軸が付着。	内面淡灰色。外面濃緑色自然軸。

土器番号	出土位置	器形	法量	遺存率	器形の特徴	成形・調整	胎土	焼成	色調
-19	11A-Na.b	高台付杯 + 女瓦	不明 不明 不明	破片	女瓦の裏面に窪んだ高台付杯が伏せた状態で付着している。女瓦は焼台として利用されたものと考えられる。	(高台付杯) 底部全面回転へう削り調整。付け高台。 (女瓦) 表面には布目の痕、裏面には縄目文が見られる。側面は1箇所残存し、二面の化粧がされている。	(高台付杯) 白色細砂粒を若干含む (瓦) 同上	(高台付杯) 堅緻。 (瓦) 堅緻。	(高台付杯) 外面は淡い黒灰色で、白い降灰が著しい。 (瓦) 表面は淡い黒灰色。
-20	11B-Na.b	女瓦	厚さ (25.5)	破片		表面には布目の痕、裏面には縄目文が見られる。側面は1箇所残存している。	白色細砂粒を多量に含む。	あまい。	表面は灰色。 裏面は淡い黒灰色。
-21	11A-Na.b	女瓦	厚さ (24.5)	破片		表面には布目の痕、裏面には縄目文が見られる。	白色細砂粒を多量に含む。	非常にあまい。	表面は淡い黒灰色。 裏面は褐色をおびた灰色。
-22	3B-III	杯	— — —	—	重ね焼き資料。 杯が3点重なる。	体部下端から、底部外縁にかけて、指のアテによるナデ整形がされる。底部切り離し部は、全面回転へう削り調整。	白色細砂粒を多く含む。	堅緻。	内外面、やや紫がかった淡灰色。
-23	A区表採	杯	(143) (99) (41) —	口縁部 ¹ ₄ 底部	体部は薄手で底部から直線的に立ち上る。器面は磨滅が激しい。	体部下端から、底部外縁にかけて、指のアテによるナデ整形がされる。底部切り離し部は、全面回転へう削り調整。ロクロ回転不明。	白色細砂粒はほとんど含まれない。	非常にあまく、さわるとサラサラする。	内外面は、褐色をおびた白色。
-24	A区表採	杯	(131.5) (108) (41.5)	口縁部 ¹ ₄ 底部	丸底気味の底部から、体部は、やや内湾して立ち上り、口唇で僅かに外傾する。	内面の立ち上り部は指の押さえによる爪の痕が見られる。底部は全面回転へう削り調整。ロクロ右回転。	褐色細砂粒を多く含む。	堅緻。内外面に火痕、重ね焼の痕が見られる。	内外面、褐色をおびた灰色。重ね焼の部分はやや青味をおびる。
-25	A区表採	杯	(127) (106) (39)	口縁部 ¹ ₄ 底部	体部は直線的に立ち上る。口唇は内側に傾斜する弱い稜を作る。	体部下端から、底部外縁にかけて、指のアテによるナデ整形がされる。底部切り離し部は、全面回転へう削り調整。ロクロ右回転。	白色砂粒をまばらに含む。	非常にあまい。	内外面は、褐色をおびた白色。
-26	A区表採	高台付杯	(122.5) (102) (41) (92)	口縁部 ¹ ₄ 底部	底部内面中央部は凹んでいる。体部は直線的に立ち上る。	底部は全面回転へう削り調整。付け高台。ロクロ右回転。	白色粒をまばらに含む。	堅緻。内外面に火痕、外面に重ね焼の痕が見られる。	やや褐色をおびた青灰色。重ね焼痕は黒灰色となる。
-27	A区表採	皿	(121) (82.5) (20) —	口縁部 ¹ ₄ 底部	平坦な底部から体部は内湾して立ち上る。	体部下端から、底部外縁にかけて、指のアテによるナデ整形がされる。底部切り離し部は回転率切り後無調整。ロクロ回転不明。	淡褐色細砂粒を多く含む。植物片が炭化した痕をまばらに残す。	あまい。内外面に火痕が見られる。	内外面は黒ずんだ淡褐色で口縁部は淡褐色となり土師器に近い。
-28	A区表採	鉢	90 61 75 —	完形	体部は外傾して立ち上り口縁部でやや張る。又口縁部内面は凹む。端部は平坦である。	底部全面、体部下端回転へう削り調整。内面に縦筋痕を残す。ロクロ右回転。	白色細砂粒をまばらに含む。	あまい。	外面は褐色をおびた灰色。内面は外面と同様であるが、内面よりも白っぽい。
-29	B区表採	高台付杯	(114) 不明 不明	口縁部 ¹ ₄ 底部	体部は直線的に外傾して立ち上る。口唇はやや肥厚する。ロクロ左回転。	底部、全面回転へう削り調整。付け高台。底部には高台を付ける際の溝が明瞭に見られ、溝には差し込んだ高台部が一部遺存している。	白色細砂粒、黒色砂粒を若干含む。	酸化炎焼成と思われる。	内外面は明るい赤味をおびた明黄褐色。
-30	B区表採	蓋	(176) — 不明 不明	口縁部 ¹ ₄ 天井部 ¹ ₄	外面は、平坦な天井部からゆるく傾斜し、檐部に至る。端部は肥厚し、外側にやや傾むく。	天井部外面は、回転へう削り調整。ロクロ回転不明。	白色細砂粒、黒色細砂粒、赤色鉱物粒を若干含む。	酸化炎焼成と思われる。	内面は黒色。外面は明黄褐色。
-31	B区表採	鉢	不明 不明 不明	体部破片		外面に平行叩き目が施される。ロクロ回転不明。	白色細砂粒、黒色細砂粒、赤色鉱物粒を若干含む。	酸化炎焼成と思われる。	内外面、淡黄褐色。

註 法量は上から口径、底径、高さ、高台径を示す。単位はmm。()は現存値を示す。

Ⅵ 不入窯跡の調査

1. 基本層序と調査区内の分布（図3，8，13，14）

不入窯跡の灰原部確認調査対象地区は、窯跡群前面の水田にあたり、台地際の幅20m，長さ50mの範囲である。調査方法はV章に既述した通りである。

基本土層は上から，Ⅰ層－現在の攪乱耕作土，Ⅱ層－近世の攪乱耕作土，Ⅲ層－須恵器を多く含む自然堆積層，Ⅳ層－須恵器を若干含む植物片からなる層，Ⅴ層－遺物を含まない自然堆積層，Ⅵ層－砂性の強い地山。各層の特徴については図14に詳述した。このうちⅢ・Ⅳ層が，「灰原」及び「遺物包含層」である。「灰原」として捉えられるのは3トレンチのA・B区のみで，この部分は須恵器片が重なる状態で検出された。このため確認段階での攪乱をさけるため，完掘はせず，良好な状態を残して埋め戻した。

各トレンチの小区における基本層位と須恵器の器種別出土量との関係を示したのがP21の表である。不入窯跡は4基が1ヶ所に集中しており，トレンチによる出土遺物の分布も，斜面直下では3トレンチに集中し，最も離れた部分でも，やや拡散はするもののやはり3トレンチに集中している。また，確認調査地区内の地山を追っていくと，東側から第3トレンチA区付近に向って浅い谷が入り込んでいることが判明しているが，遺物の拡がり第1トレンチ側よりも第6トレンチに向っていることは，上述の事象と一致する。尚，表によると第1トレンチの遺物出土量はほとんどない様であるが，全体で計65点出土しており，包含層はさらに外側に拡がっているものと思われる。

2. 出土遺物（図9，10）

永田窯跡と同様主要なもののみ概説する。2，3の杯は回転糸切り後無調整のもので他に3C－1点，3G－2点，4B－1点の計6点出土している。6～8・10は盤で既報告例は2点のみのため図示した。9は碗と思われるが不入窯跡としては初見である。底部は回転糸切り離し後無調整のままで，堅くなった後にナイフの様なものでナデ部との段差を削り取ろうとしている。12の蓋は天井部外面にキャタピラ状の圧痕が見られ，色調は暗赤褐色と特異である。17は円面碗で，永田窯跡同様，下部に突帯をもつ。

また，永田窯跡と同様，出土数一覧表によって，B～D区出土の高台付杯・高台付碗と蓋との出土数を比較すると，前二者の底部片（c＋e）の合計70点と後者の口縁破片数（b）73点とはやはり近似し，高台付杯・高台付碗と蓋類との関係がうかがわれる。

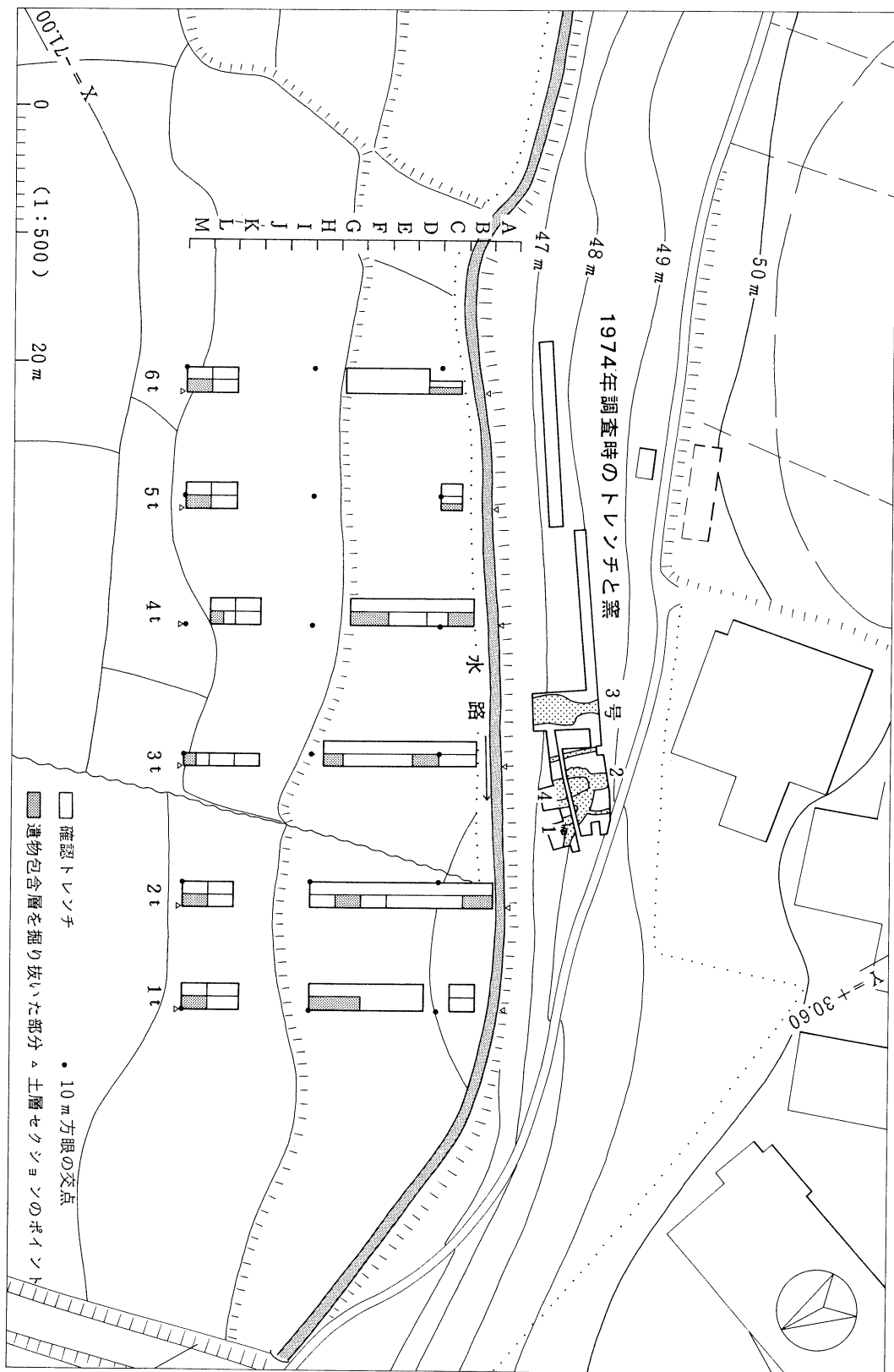


図 8 不入窯跡、確認トレンチ配置図

不入窯跡，確認トレンチ出土須恵器片出土数一覧表

ト レ ン チ	土 層	杯 類										蓋 類						特殊・大型製品					合 計	
		口 縁				底 部						不 明	口 縁			ツ マ ミ	不 明	長 脚 盤	甕	壺	鉢	硯		不 明
		a	b	c	d	a	b	c	d	e	f		a	b	c									
1 B	Ia																							
2 B	I																					1	1	
	II III										1							1					2	
3 D	I		20	6	1		15	4				39		6		1		5					97	
	IIa																							
	IIb		30	3			20	8		1		49	2	5		1	3	1	1			2	126	
	IIIa		255	32	3		83	34	23	12	1	361		58	1	8	13	1	6	6		25	922	
4 C	IIIb		6	3			13	4		1		4		3		1	4		2			3	44	
	I		3				1	2				10		1					1			1	18	
	IIb IIIa											4								1		1	6	
5 C	IIIa		4				3	1		3													11	
	I II IIIc																				1		2	
6 C	I IIb IIIc																						1	
合 計			318	44	4		136	53	23	17	1	468	2	73	1	11	20	2	16	8		33	1,230	
1 M	I																							
	II																							
	IIIa																					1	1	
	IIIb																							
2 M	Ia							1															1	
	Ib						2																2	
	II		1				1		1										1			1	5	
	III						1					3											4	
3 M	I						1	1				2											4	
	II		23	12			26	13				38		6		1	3	1	2			9	135	
	IIIa		39	1			10	4		1		84	1	7		1	2		2			1	153	
	IIIb		4		1		1			1		9		1								2	19	
	IVa		2									3											5	
	IVb			2			2							1								1	6	
4 L	Ia												1										1	
	Ib							1				5		1									7	
	IIb		1				3					5		1									10	
	IIIa		11				4	2				14		1							1		33	
	IIIb			1								1									1		3	
5 M	Ia											1											1	
	Ib		1																				1	
	IIb																						1	
	IIIa						1																1	
	IIIb						1					1									1		2	
6 M	I																			1			1	
	IIb		1									5											6	
	IIIa											3						1	2				6	
	IIIb											1							1				2	
合 計			83	16	1		53	22	1	2		175	1	19	1	1	5	1	5	5	1	1	17	410

Ⅷ 周辺の遺物散布地区（図3・7）

A区 永田窯跡において新たに発見された窯で、基数は不明である。1号窯の北東約40mにあり、台地斜面部から水田中にかけて須恵器片が散布する。表採された遺物は杯類の破片34，蓋類の破片6，鉢1，その他3点の計44点である。焼成不良のものが多いことを特徴とする。

B区 やはり永田窯跡内の一部で、1号窯の北西側に隣接する畑において遺物が散布する。表採された遺物には、酸化炎焼成されたと思われる淡黄褐色系のロクロ使用の土器と、青灰色系の須恵器とがある。前者は、杯類の口縁50・体部196，杯底部8，高台付杯底部

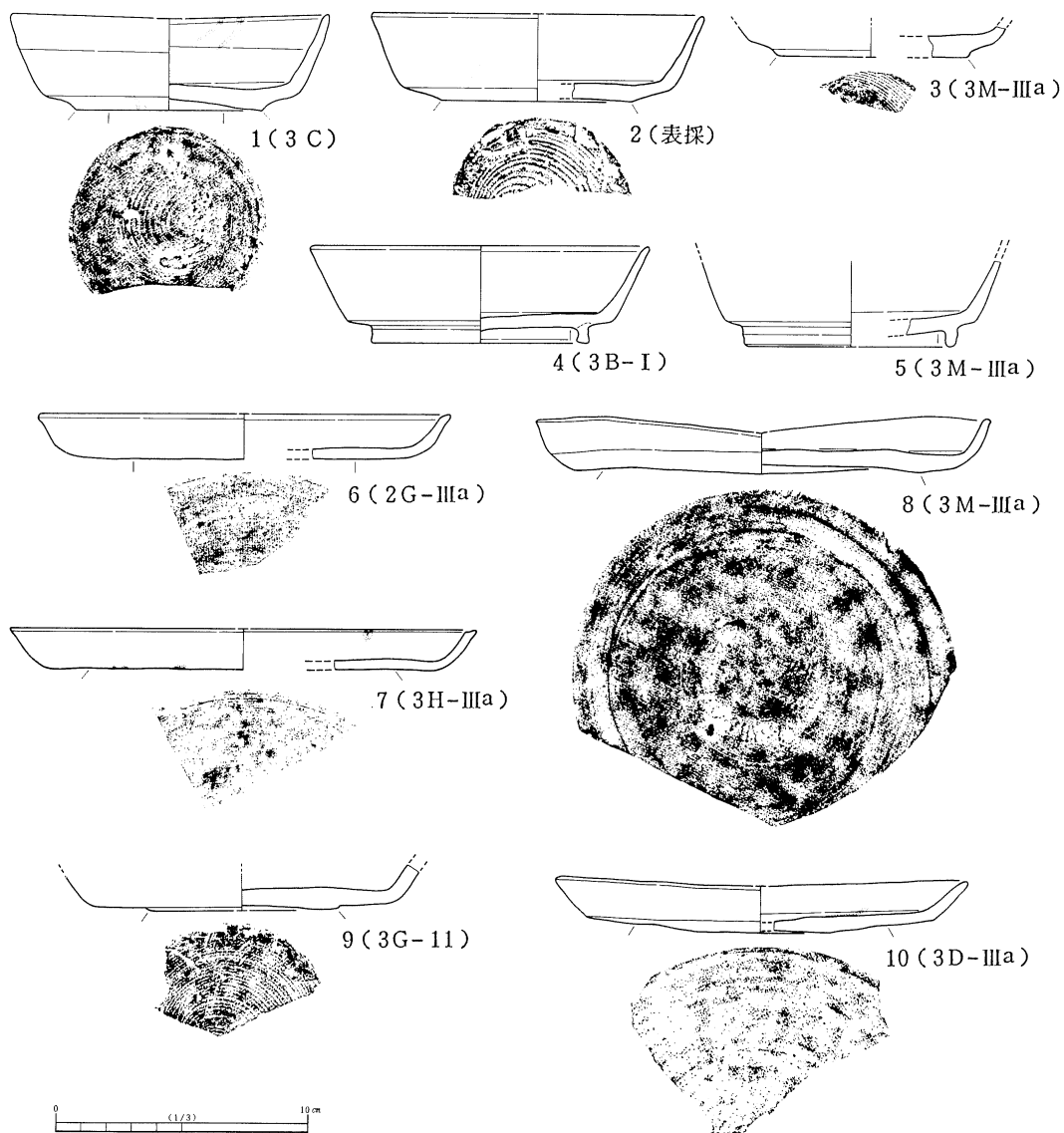


図9 不入窯跡、確認トレンチ出土遺物（1）

19, 杯類底部8, 蓋口縁40, 蓋天井部4, 蓋つまみ2, 甕口縁2, 甕胴部11, 不明5の計345点, 後者は杯, 蓋などの6点である。前者については, 杯の体部下端から底部外縁にかけて指のアテによるナデが行なわれていること, 杯よりも高台付杯が多いこと, タタキ目を有する甕の胴部破片が多いこと, 器種が4つしか確認されないことなどを特徴とする。尚, 2HのI層で同様の高台付杯が1点出土している。

C区 永田窯跡東方に近接する台地平坦面で, 個人宅造に伴って市原市教育委員会によって一部が発掘され, 竪穴が確認された。遺物は数十点ある。

D区 C区南東側に隣接する畑で, 須恵器12点, 土師器8点が表採された。D区とは本来同一のものであろう。

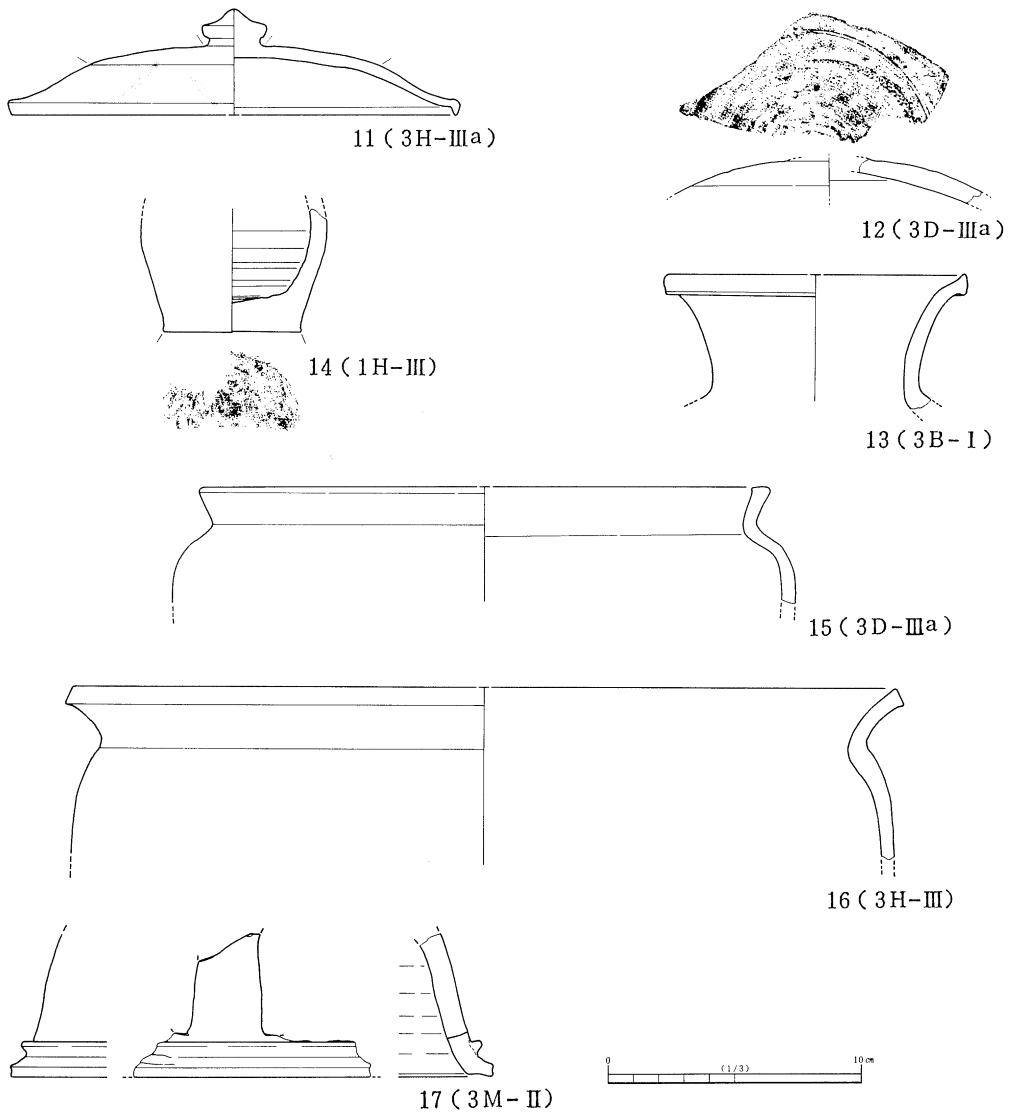


図10 不入窯跡、確認トレンチ出土遺物(2)

不 入 窯 跡 土 器 表

土器番号	出土位置	器 形	法 量	遺 存 率	器 形 の 特 徴	成 形 ・ 調 整	胎 土	焼 成	色 調
図9-1	3 C	杯	(126) (95.5) (37) —	口縁部 ^{1/4} 底部 ^{1/2}	歪んでいるため底部は上げ底状となる。体部内面は凹凸をなしており、底部から外傾し、やや内湾気味に立ち上る。口唇は内側に傾斜する稜を作る。	体部下端から底部外縁にかけて、指のアテによるナデ整形がされる。底部切り離し部は中央に回転糸切り痕を残し、外縁を2段に回転へう割り調整する。ロクロ右回転。	白色細砂粒を少量含む。	堅緻。内外面に火焼が見られる。	内外面は褐色をおびた灰色を基調とする。外面には黒色のシミが見られる。
9-2	表 採	杯	(131) (106) (35) —	体部 ^{1/4} 底部 ^{1/2} 口縁部は他かに遺存	体部は直線的に外傾して立ち上る。口唇は内側で僅かに肥厚する。	体部下端から底部外縁にかけて、指のアテによるナデ整形がされる。底部切り離し部は回転糸切り後未調整。ロクロ回転不明。	白色細砂粒を少量含む。	堅緻。内外面に火焼が見られる。	内外面は褐色をおびた灰色。
9-3	3M-IIIa	杯	不明 (96) 不明 —	底部 ^{1/2}	底部の小破片である。	体部下端から底部外縁にかけて、指のアテによるナデ整形がされる。底部切り離し部は、回転糸切り後未調整。ロクロ回転不明。	白色細砂粒を含む。	あまい。	内外面は、くすんだ白色で、やや青味をおびる。
9-4	3B-I	高台付杯	134.5 105 39 86	口縁部 ^{1/2} 底部 ^{1/2}	体部は直線的に外傾して立ち上る。内面の立ち上り部はやや凹む。口唇は内側に傾斜する稜を作る。	底部全面回転へう割り調整。付け高台。ロクロ右回転。	白色細砂粒、黒色砂粒を若干含む。	堅緻。外面に重ね焼の痕が見られる。	内外面は水色がかった青灰色。外面の重ね焼の痕は黒灰色。
9-5	3M-IIIa	高台付杯	不明 (87.5) 不明 (82)	底部 ^{1/2}	体部は直線的に外傾して立ち上る。	底部全面回転へう割り調整。付け高台。	白色細砂粒を若干含む。	非常に堅緻。	内外面は黒灰色を基調とする。外面の大半は斑状の剥離が見られ白っぽい。
9-6	2G-IIIa	盤	(164) (132) (18) —	口縁部 ^{1/4} 底部 ^{1/2}	体部は丸味をもって立ち上り、中位で僅かに外反する。口唇は外側につまみ出され、内側に弱い稜を作る。	体部下端から底部外縁にかけて、指のアテによるナデ整形がされる。底部切り離し部は、全面回転へう割り調整。ロクロ左回転。内面に縦筋痕が見られる。	白色細砂粒を少量含む。	堅緻。内外面に重ね焼の痕が見られる。	内外面は明るい灰色。外面の重ね焼の痕は暗灰色。
9-7	3H-IIIa	盤	(185.5) (154) (16) —	口縁部 ^{1/4} 底部 ^{1/2}	体部は緩やかに内湾して立ち上り、口縁部で僅かに外反する。口唇は、外側につまみ出され平坦な面をなし、この面に凹をもつ。	体部下端から底部外縁にかけて、指のアテによるナデ整形がされる。底部切り離し部は全面回転へう割り調整。ロクロ右回転。	白色細砂粒を少量、黒色粒を若干含む。	堅緻。内外面に火焼、外面に重ね焼の痕が見られる。	内外面は緑がかった青灰色。外面の重ね焼の痕は淡青灰色。
9-8	3M-IIIa	盤	180.5 136 11.5 —	口縁部 ^{1/4} 底部 ^{1/2}	体部は内湾気味に立ち上り、中位に弱い稜を作る。口唇は比較的平坦で、外側に僅かにつまみ出される。歪んでいる。	体部下端から底部外縁にかけて、指のアテによるナデ整形がされる。底部の切り離し部は、全面回転へう割り調整。ロクロ右回転。	白色細砂粒を含む。	非常に堅緻。底部内外面に火焼、重ね焼の痕、体部内外面に白色の降灰が見られる。	内外面は青灰色を基調とし、部分的に白色の降灰と黒灰色の重ね焼の痕がある。
9-9	3H-IIIb	碗	不明 (115.5) 不明 —	底部 ^{1/2}	底部の破片である。底部切り離し部とナデ部の段が一部削り取られている。	体部下端から底部外縁にかけて、指のアテによるナデ整形がされる。底部切り離し部は、回転糸切り後未調整。ロクロ右回転。	白色細砂粒を少量含む。	ややあまい。	外面は、やや褐色をおびた明灰色。内面の基調は淡青灰色。部分的に赤味をおびる。
9-10	3D-IIIa	盤	(164) (138.5) (18) —	口縁部 ^{1/4} 底部 ^{1/2}	底部は平坦な中央部とやや立ち上がる外縁部にされる。体部は外反しながら立ち上る。歪んでいる。	体部下端から底部外縁中位にかけて、指のアテによるナデ整形がされる。底部の切り離し部は全面回転へう割り調整。ロクロ右回転。	白色細砂粒を僅かに含む。	堅緻。内面に火焼、内外面に重ね焼の痕が見られる。	内外面は明るい青灰色を基調とし、内外底面は緑がかる。内外面の一部に斑状の剥離が見られ白っぽい。
10-11	3H-IIIa	蓋	(175.5) (142) —	口縁部 ^{1/4} 天井部 ^{1/2}	外面は丸味をもった天井部から水平の椗部に至る。椗部は垂直に下がる。ツマミは宝珠形を呈す。やや歪む。	天井部外面は回転へう割り調整。ツマミ周辺、椗部はナデられる。ロクロ右回転。	白色細砂粒を含む。	堅緻。外面に火焼、内外面に重ね焼の痕が見られる。	外面は青灰色、火焼は黒灰色。内面は黒灰色を基調とし、部分的にシミ状の白色が見られる。
10-12	3D-IIIa	蓋	不明 不明 不明 —	天井部破片	天井部は丸味をもつ。ツマミを欠く。外面には鋸歯状の凹痕が付く。	天井部は回転へう割り調整の後、全面にナデを施す。ロクロ左回転。	赤色銚物がまばらに見られる。白色細砂粒を少量含む。	堅緻。内外面に重ね焼の痕が見られる。	内外面ともに暗赤褐色。重ね焼の痕は暗灰色。
10-13	3C-I	蓋	(120.5) 不明 不明 —	口縁部 ^{1/4}	口縁部は外反し端部で上方につまみ出される。	外面は丁寧なナデが施されている。ロクロ回転不明。	白色細砂粒を僅かに含む。	非常に堅緻。	内外面は黒灰色を基調とする。内面は斑状の剥離によって、外面は降灰によって部分的に白っぽい。
10-14	1H-III	蓋	不明 54 不明 —	底部 ^{1/2}	小形の蓋である。平坦な底部から外傾して立ち上がる体部は中位で僅かに張り、内湾する。内面のロクロ目は、極めて強い。	体部は緩やかな鋭い削り、底部は不定方向の手持ちへう削りによって丁寧に仕上げられる。ロクロ回転不明。	白色細砂粒を僅かに含む。	非常に堅緻。内外面に自然釉が付着する。	内外面は紫色をおびた灰色を基調とし、部分的に濃緑色の自然釉が見られる。
10-15	3D-IIIa	鉢	(226) 不明 不明 —	口縁部 ^{1/4} 肩部 ^{1/2}	やや張った肩部から、口縁部は外傾して立ち上がる。端部は平坦で、内側に僅かに突出する。	内外面は丁寧なナデが施される。ロクロ回転不明。	白色細砂粒を僅かに含む。	非常に堅緻。	内外面は黒灰色を基調とし、部分的に斑状の剥離が見られ白っぽい。
10-16	3H-III	鉢	(325) 不明 不明 —	口縁部 ^{1/4} 肩部 ^{1/2}	緩やかな肩部から、口縁部は外反して立ち上がる。端部は外傾し、外側に突出する。	内面は丁寧なナデが施される。ロクロ回転不明。	白色細砂粒を僅かに含む。	非常に堅緻。内外面口縁部、外面肩部に斑状の剥離が見られる。	外面は黒灰色。内面は灰色。内外面には、部分的に斑状の剥離が見られ白っぽい。
10-17	3M-II	円面碗	不明 (190.5) 不明 —	台脚部 ^{1/4}	台脚部下位に1条の隆帯が付く。通し孔は2箇所に残存する(各幅約5mm)。	通し孔は切り抜かれている。隆帯は貼り付けである。台脚部下位に縦筋み痕が見られる。ロクロ回転不明。	白色細砂粒を僅かに含む。	非常に堅緻。	内外面は黒灰色。外面上半は斑状の剥離をしてやや白む。
10-18	3D-IIIb	高台付杯	—	—	重ね焼資料。高台付杯が3点重なる。内面に窯壁片が付着する。				

K ま と め

今回の調査は灰原の範囲確認が目的であった。これについては、既述の様に灰原というよりは遺物包含層と呼ぶべき層が調査対象区全域に広がっていることが明らかとなり、その遺物の出土傾向は窯体の分布と一致していることが判った。

しかし、トレンチ発掘ということもあり、各窯ごと、あるいは一回の操業ごとの廃棄遺物の広がりや層序を把握するまでには至らず、この点、既に行なわれている窯本体の調査結果を大きく超える資料を得ることなく、飽くまで補足的資料に留まった。この様な理由から、本章ではⅢ・Ⅳ章で示した問題的に言及することなく、今回の調査によって新たに確認された資料、及びこれから提起される若干の問題点を列記するに留めたい。

今回の調査で新たに得られた資料は以下のとおりである。まず、永田窯跡においては、口径が8 cm以下の小型短頸壺（薬壺）が新しい器種として確認されたこと、既報告では不入窯跡で1点しか出土していなかった円面硯が本窯跡で3点出土したこと、底部回転糸切り離し後無調整の杯が第1トレンチに限って6点出土していること、焼台として利用されたとされる瓦が第11トレンチに限って4点出土していることなどである。また、確認トレンチの土層からは、現在の水田面は、当時、斜面際の一部の地山が露出していたが、数m先で急激に落ち込み湿地となっていたことが判明した。

不入窯跡については、前回の調査では確認されなかった底部回転糸切り後無調整の杯が6点出土している他は、円面硯が新たに1点発見されたのみで、既報告の出土遺物にバラエティーがあったのに比べ見劣がする。また、現在の水田面は、当時は調査区のほぼ中央付近まで地山、あるいは、地山の上に若干堆積した表土層が続き、やはり急激に落ち込んで湿地となっていたようである。

以上の事から問題となるのは、永田窯跡と不入窯跡との性格の違いについてである。国平健造氏は、両窯跡の出土遺物の違いから、永田窯跡を主に民間窯的性格を帯びたもの、不入窯跡を官窯的性格を更に強くもった窯として捉らえている（Ⅳ章参照）。この場合その様な性格分けがなされていたこと自体の有無についてはもちろん、両窯跡の各窯の推移（土器編年）をどの様に捉えるかによっても、永田、不入窯跡出現の契期、及び変遷過程が異なってくるものと思われる。両窯跡の出土遺物の違いとしては、不入窯跡出土の水瓶・平瓶・円面硯・多口壺・薬壺などが掲げられているが、今回の調査では永田窯跡から、円面硯・薬壺などが出土しており、また前回の調査でも不入窯跡には見られなかった横瓶が出土している。さらに、この様な特殊な遺物を出土する窯が特定されたとしても、これを永田窯跡と不入窯跡との性格の違いとして捉えるのか、あるいは時間的差によるものと考え

えるのか，問題となろう。

次に問題となるのは，底部回転糸切り離し無調整の杯の存在についてである。この杯の存在はしばしば，石川窯跡との関係の中で注目されている。前回の調査では永田 5 号窯に集中していたが，今回の調査でも永田窯跡では第 1 トレンチからのみの出土でありやはり集中する傾向を見せており，特定の窯の存在を推定させる。ただ，不入窯においても出土していることから最終的な操業の在り方としては，やや拡散した遺物の出土状態を示しており，断定はできない。

尚，今回の報告にあたって，前回の調査資料を実見する機会を得たが（県立房総風土記の丘に収蔵されている），永田 5 号窯「6 層」の遺物として底部中央に回転ヘラ切り状の痕跡があり，周縁部を回転ヘラ削りしている杯を 1 点実見した。1 点のみのためその性格は不明であるが今後明確にされなければならないものである。

今回の調査は灰原の保存区域確定のための確認が主目的であったため，各層ごとの細かいデータが得られなかった。これは，調査地が常に冠水状態にあったことや，次年の耕作のための現状回復の必要性があったことによる事が大きく，水田調査の難しさを痛感した。将来において本調査を行なう場合は，安全性の確保と伴にこれらの事に留意すべきであろう。

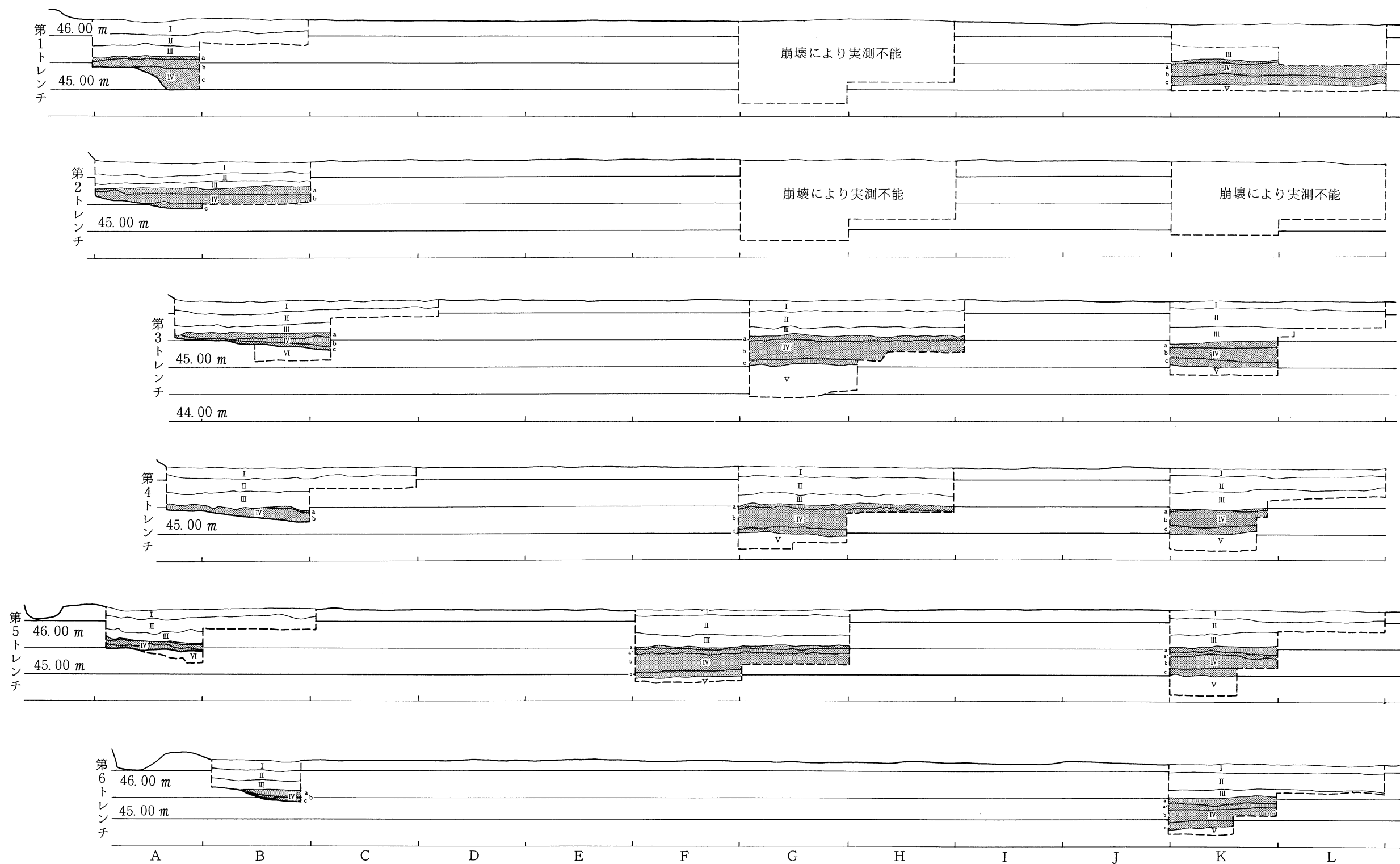
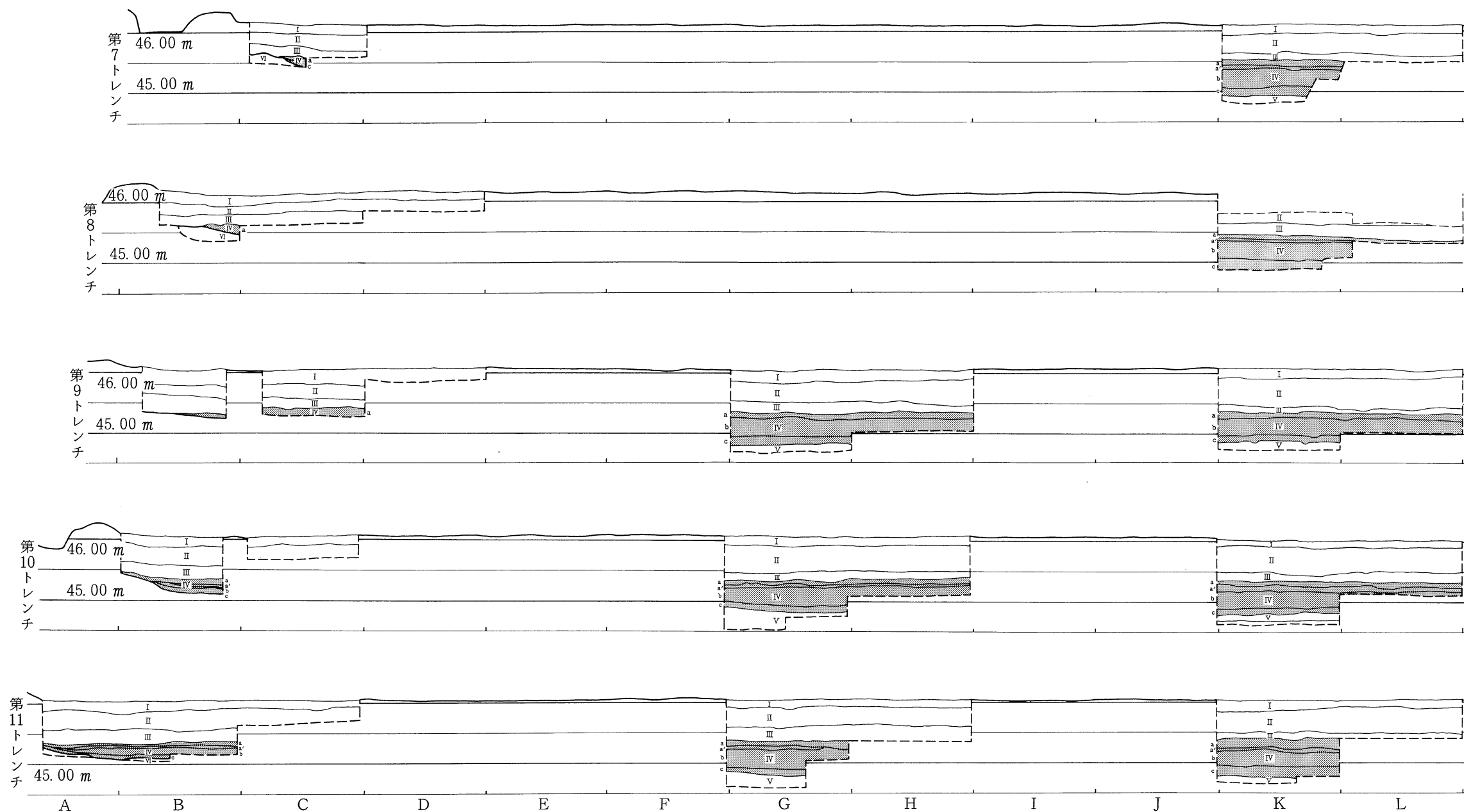


図 11 永田窯跡、遺物包含層土層断面図 (1)



永田窯跡、土層説明

- I 現在の耕作土層。不入と同様、上部のしまりのない茶褐色酸化層と下部のしまりのある暗灰色環元層とに分かれるが、細分はしなかった。
- II 近世の耕作土層。暗灰色。台地斜面の地山崩壊粒を霜降状に含む層。不入に比べ均一的ではない。炭化粒を多く含む。
- III 暗灰色。台地斜面の地山崩壊土を多く含む層。地山崩壊土は斜面側に著しく、対岸に向かってしだいに少なくなる。自然堆積層と思われる。
- IV 須恵器を含む自然堆積層（包含層）4層に細分される。
 - a. 暗灰色 灰色土中に黒色土（灰・スス状のもの）を多量に含む。
 - a' 灰色 a層とc層との漸移的な層、灰色土中に黒色土粒をまばらに含む。確認されないトレンチもある。
 - b. 灰色 黒色土は全く含まない均一的な層で明確な自然堆積を示す。
 - c. 暗灰色 a層と同様、多量の黒色土を含む。
- V 灰色。遺物や黒色土を含まない自然堆積層、草や木などの植物層をまばらに含む。
- VI 淡青褐色。砂性の強い地山層。

図12 永田窯跡、遺物包含層土層断面図（2）

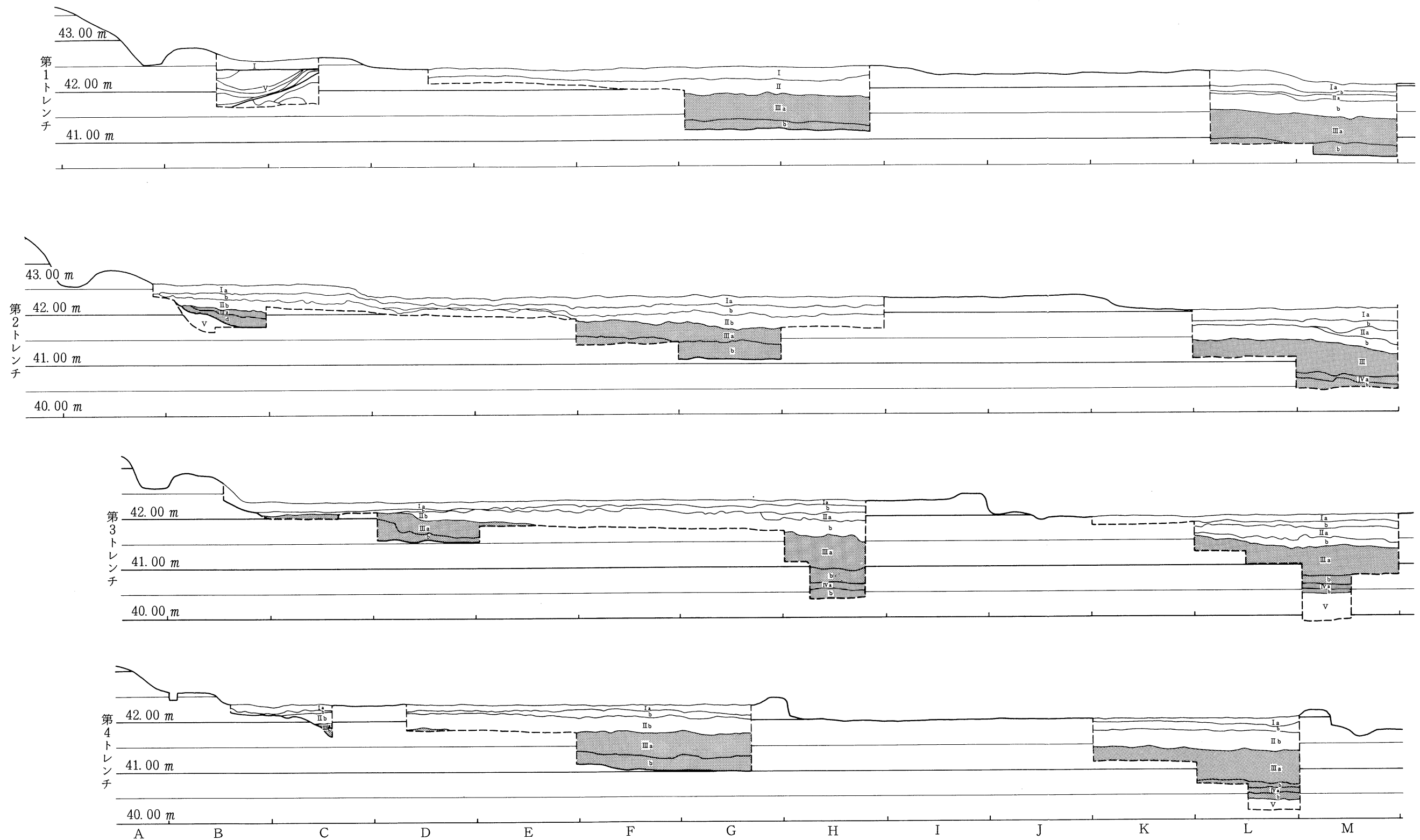
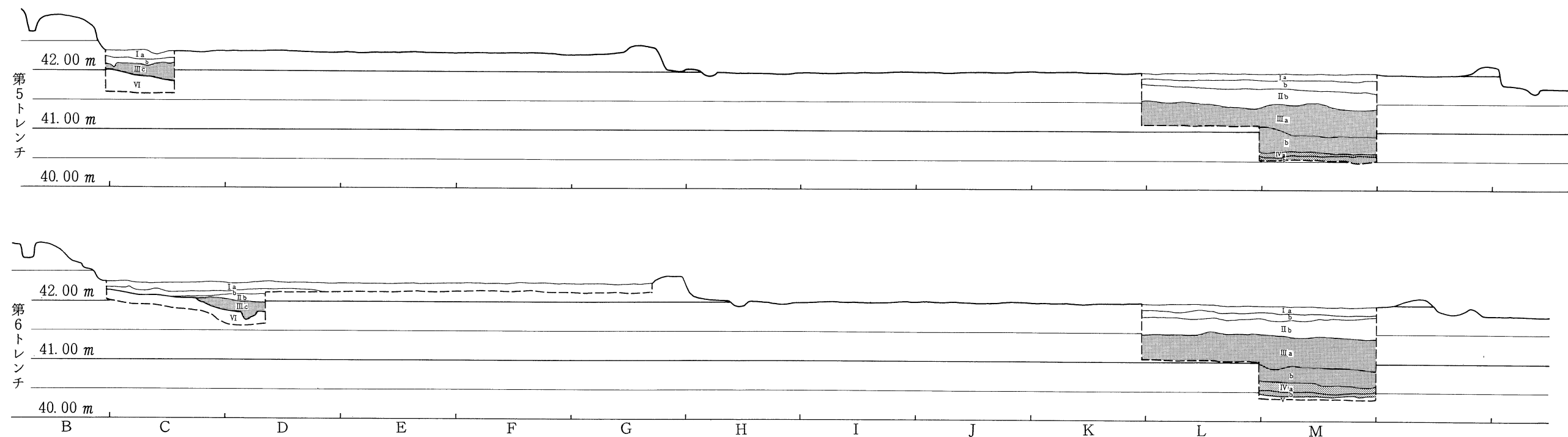


図 13 不入窯跡、遺物包含層土層断面図 (1)



不入窯跡、土層説明

- I 現在の耕作土層 a. 茶褐色。酸化が著しく茶褐色となる。しまりなし。
b. 暗灰色。還元化しているが検出後は短時間で茶褐色となる。炭化物を若干含み比較的しまりがある。
- II 近世の遺物包含層（耕作土層） a. 暗灰色。台地斜面の地山崩壊粒が霜降状に均一に混ざり攪乱層（耕作土）であることを示している。炭化粒を多く含む。陶器、古銭、キセルが出土している。
b. 暗灰色。基本的にはb層と同一であるが、地山崩壊粒、炭化粒が小なくなり、やや暗くなる。
- III 須恵器を含む自然堆積層（包含層） a. 暗灰色。有機性の強い粘質土を基本とし、炭化粒（10～30mm大の大粒のことが多い）、植物片、砂理（10～30mm）をまばらに含む。
b. 暗褐色。基本的にはa層と同一であるが、炭化粒等をより多く含み、また植物片はIVa層中のものと同様黒色化している。
c. 黒褐色。a. b層に比べ黒味が強く、堅く粘性がある。砂理、炭化物などは含まない。窯の影響を受けない本来の自然堆積層と思われる。
- IV 須恵器を若干含む植物片からなる層 a. 黒褐色。草、木の根を主体とし、アシ・カヤ・サクラ等を多く含む層、b層と同一であるが黒色化している。
b. 茶褐色。a層と同一だが茶褐色を呈している。
- V 暗灰色。有機性の強い粘質土で自然堆積層。炭化粒、遺物は含まれない。
- VI 淡青褐色。砂性の強い地山層。

図 14 不入窯跡、遺物包含層土層断面図（2）

1. ふじ山から永田台地をのぞむ（南東側より）



2. 永田窯跡
調査区域遠景（南側よりのぞむ）
中央左寄り，台地沿辺の水田面。



3. 永田窯跡
調査区域近景（北西側よりのぞむ）
左側の台地斜面部に窯跡群がある。調査区は中央水田面。中央にふじ山をのぞむ。



4. 永田窯跡
南東部調査トレンチ配置状況（北西側よりのぞむ）
右側の縄張りは調査区域を示す。



1. 永田窯跡
調査区域台地側トレンチ配置状況（南東側よりのぞむ）
手前は第5トレンチ



2. 永田窯跡
北西部調査トレンチ配置状況（南側よりのぞむ）
台地斜面中央部の杉林の左側に新発見の窯跡群がある（永田A区）。手前は第5トレンチ



3. 永田窯跡
第2トレンチ配置状況（南東側よりのぞむ）
正面の台地斜面にある畑が永田B区。



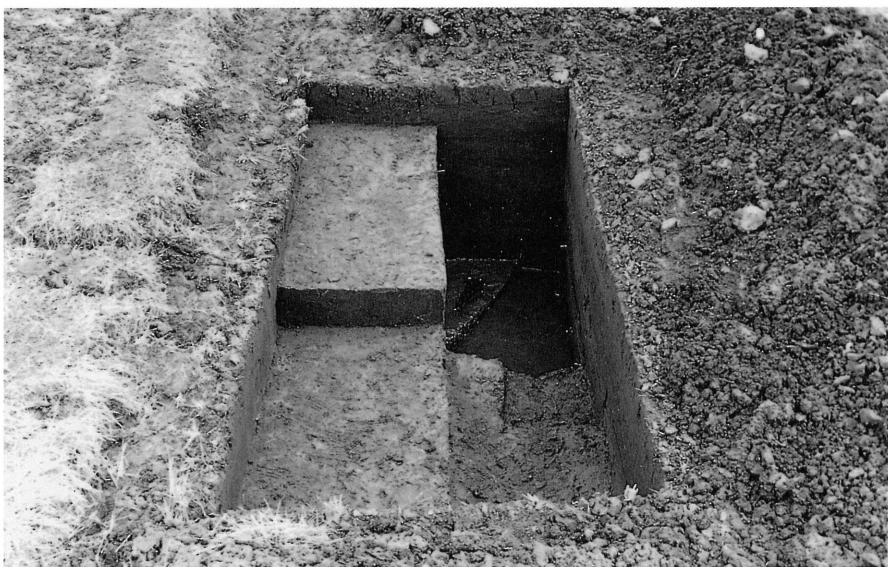
4. 永田窯跡
調査区域より「短絡部」方向をのぞむ（北東側より）
中央は音信山塊、右側は久保浅間山。曲流による滑走斜面（左側）と攻撃斜面（右側）の状態が良くわかる。



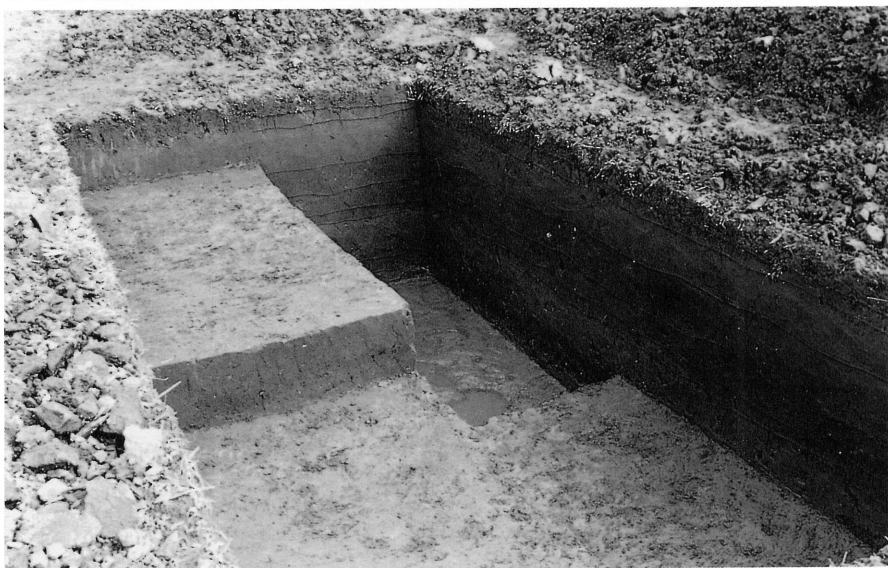
1. 永田窯跡
第4トレンチA区
土層断面（西側より
のぞむ）
下面の砂質地山が
急激に落ち込んでいる。



2. 永田窯跡
第3トレンチG・
H区発掘状況（南西
側よりのぞむ）
G区南東側の底面
から無加工の丸太が
出土している。



3. 永田窯跡
第6トレンチK・
L区土層断面（西側
よりのぞむ）



1. 不入窯跡
調査区全景（北西側よりのぞむ）
左側遠景にふじ山が見える。



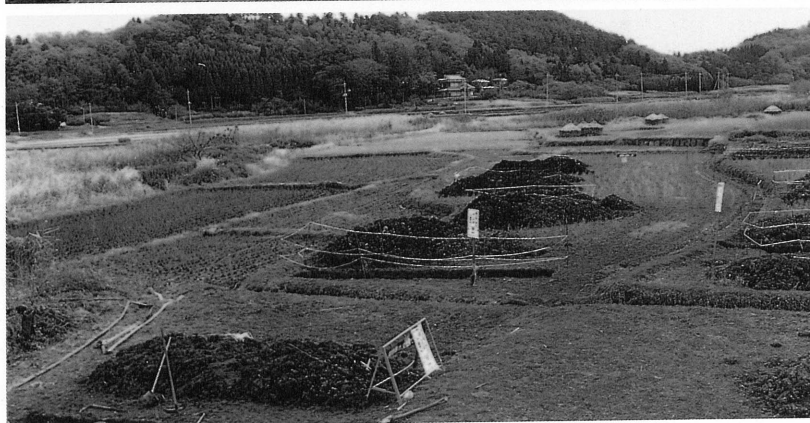
2. 不入窯跡
調査区全景（南東側よりのぞむ）
手前の縄張りは調査区域を示す。



3. 不入窯跡
トレンチ配置状況（北西側よりのぞむ）
滑走斜面であることがよく判る。手前は第2トレンチ。



4. 不入窯跡
トレンチ配置状況（西側よりのぞむ）
手前は第2トレンチ。



1. 不入窯跡
第4トレンチB～
G区発掘状況（北東
側よりのぞむ）

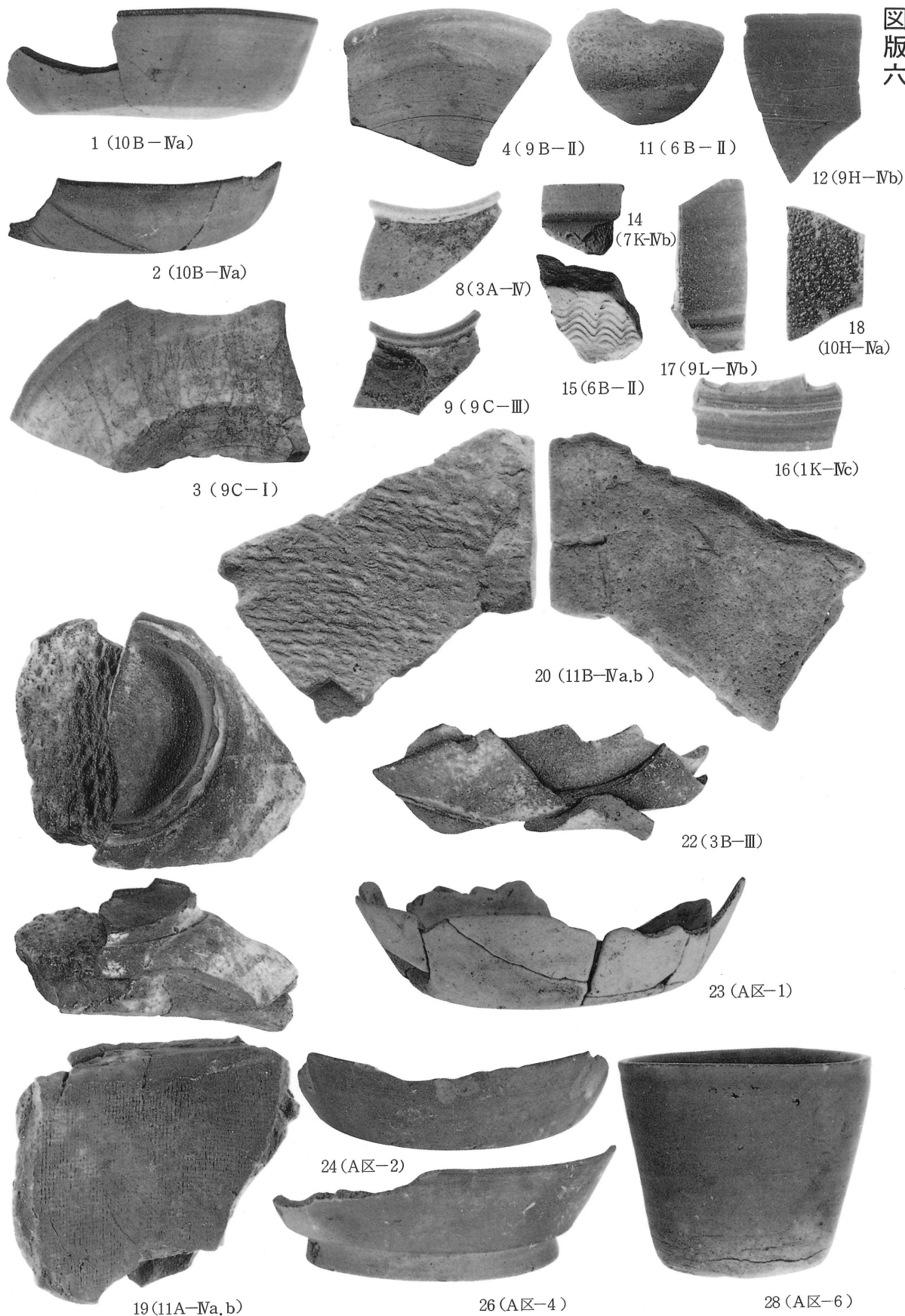


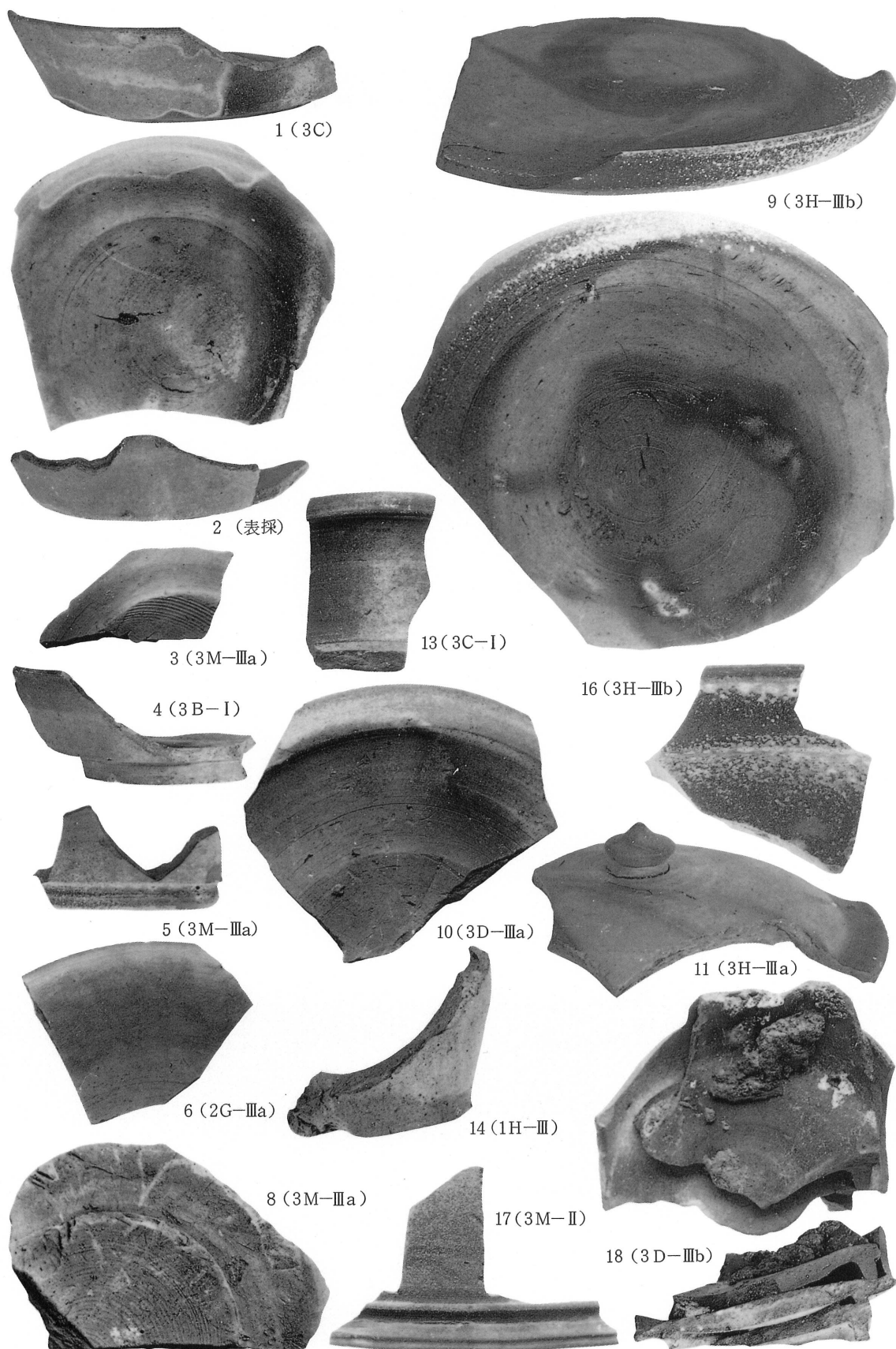
2. 不入窯跡
第2トレンチB～
H区発掘状況（東側
よりのぞむ）



3. 不入窯跡
第6トレンチL・
M区土層断面（南側
よりのぞむ）









1. 永田窯跡第10トレンチA区土層断面



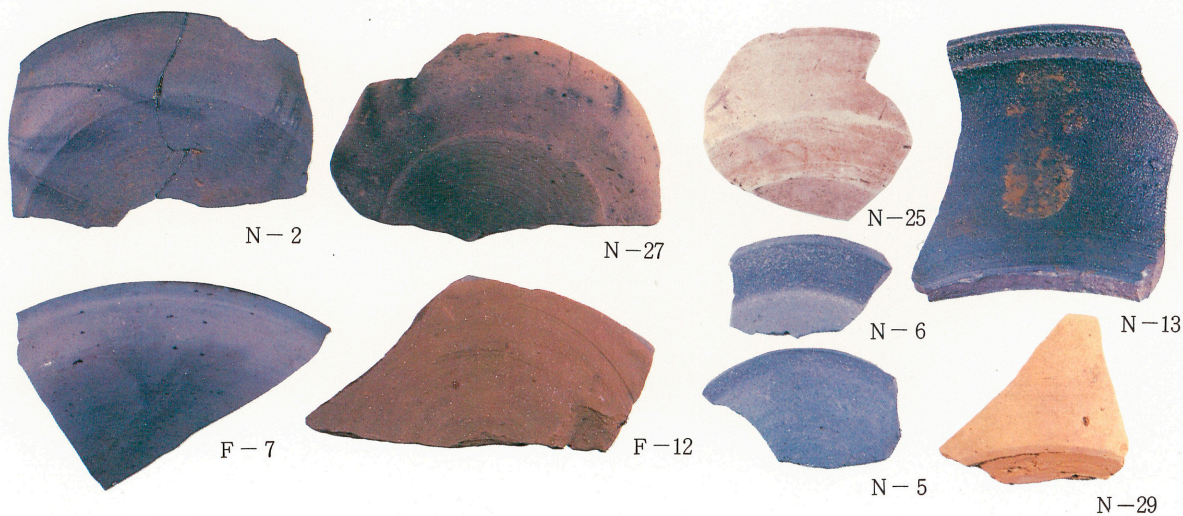
2. 永田窯跡第11トレンチK区土層断面



3. 不入窯跡第3トレンチD区土層断面



4. 不入窯跡第3トレンチH区土層断面



5. 確認トレンチ出土須恵器（番号は挿図No.と図じ，N＝永田，F＝不入）

財団法人 市原市文化財センター調査報告書第7集

—— 千葉県市原市 ——

永田、不入窯跡

昭和60年3月10日 印刷

昭和60年3月15日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 財団法人 市原市文化財センター

印 刷 三 陽 工 業 (株) 市 原 支 店

千葉県市原市五井5510の1

TEL 0436(22)4348